自由と抵抗の雑誌

黒煙
BLACK SMOKE

Vol.1

東シベリア集団

自由と抵抗の雑誌

黒煙 Vol.1

自由と抵抗の雑誌『黒煙』創刊にあたって

太田やくーと（東シベリア集団・管理人）

はじめに

このたび、「東シベリア集団」というコレクティブの主催で、『黒煙』という雑誌を創刊することになりました。「東シベリア集団」というのはDiscordサーバーの名称で、私（やくーと）のTwitter相互フォロワーとの交流を目的として作成されたものです。基本原則は①反資本主義、②反天皇制、③アンチファシズム、④警察の解体、⑤刑務所の廃絶、となっています。ただしこれは「このような人がいると嬉しい」程度のもので、必ずしも同意する必要はありません。

「東シベリア集団」の名前の由来は、私のペンネームが由来している「ヤクート（サハ共和国）」が東シベリアに位置していることと、アナーキスト革命家のバクーニンが流刑となった地（イルクーツク）であることですが、全体的に怪しい名前にしたいという気持ちが強かったからです。サーバー作成当初は「やくーとらの集団」という、オウム真理教の分派みたいな名前でした。

「自由と抵抗」のテーマ

この雑誌は「自由と抵抗」が共通テーマになっています。自由を求めない人が果たして存在するでしょうか。私たちは自由を手にするために、日々どのように自分の生活や働き方を変えていくかとか、社会のシステムを変革するかとかいったことに思索をめぐらせています。十七世紀初頭に起源をもつ自然法理論の思想家たちは「人間であるというむきだしの事実しかない自然状態において、人間とはなんなのか」という問いに対して、「人類の本来の姿は自由と平等であると結論づけた」と言います。[1] そう、本来の人類というものとは自由と平等を欲する生き物であり、人類史とは自由と平等を獲得するための闘いの積み重ねなのです。

では、『黒煙』ではなぜ「自由」にフィーチャーし、「平等」の代わりに「抵抗」を入れているのでしょうか。それはアナーキズムにヒントがあります。アナーキズムの父とも言われるプルードンの「一九世紀における革命の一般理念」を参照してみましょう。フランス第二共和政期（一八四八〜一八五二年）における社会主義者の政治家であるルイ・ブランは、フランス革命のスローガンで知られる「自由・平等・友愛」の理念を「平等・友愛・自由」に逆転させようとしたと言われています。つまり、平等な社会が到来してからはじめて、政府の便宜が許す範囲で、多少なりとも自由になるだろうということを主張したわけです。

このことについてプルードンは、「今日われわれが取り組むのは『平等』からであり、第一番目に採るべきは平等であり、革命の新しい殿堂を建てるべきは平等の上にであって、『自由』などは友愛から演繹されるはずだ、というわけだ。ルイ・ブランは、司祭が死後に天国を約束するように、結社設立後に自由を約束する。こんな工合に言葉の置き換えに興じる社会主義とは一体なんだろう、答は読者におまかせする」と批判します。[2]

本来の社会主義の理念はそうではないと言ったところで、歴史を見ると社会主義国家とされる様々な国において強権的な独裁体制が作られてきたことは事実であろうと思います。また社会主義の実現のための「革命運動」のなかで

1　デヴィッド・グレーバー＋デヴィッド・ウェングロウ（酒井隆史訳）『万物の黎明』（光文社、二〇二三年）三九頁
2　P.J.プルードン（陸井四郎・本田烈訳）「十九世紀における革命の一般理念」『プルードンI（アナキズム叢書）』（三一書房、一九七一年）百三頁

も個人の自由が制限され、組織のヒエラルキーの上の人の言うことに従わなければならないという状況は多く見られます。多くの人が社会主義や共産主義と聞いて感じるスティグマは、恐らくこのような事例が頭の中にあるからではないでしょうか。

アナーキストは平等を実現するための闘いであっても、自由が制約されることを好みません。あらゆる権力や支配を拒絶するのであれば、「革命」の過渡期における独裁的な権力や、「革命運動」内において主従関係を作るような支配も認めないからです。「上から」の平等社会を実現することに重点を置いている強権的な社会主義者や共産主義者と、人間の自由を尊重して自由に生きることを選択するアナーキストとは、世界観の基礎の部分がまったく異なるわけです。

しかしそれは平等の実現を放棄したことを意味するわけではありません。それを実現するための過程が大切なのです。「革命」の先には必ず平等な社会が待っているからといって、いつ訪れるかもわからない「革命」の瞬間までずっと抑圧に耐え抜くことはできません。たとえば、ロシア革命期においてボリシェヴィキの支配に不満を昂じて反乱を起こしたクロンシュタットの水兵たちは、『『プロレタリア国家』とか『プロレタリア独裁』とかいった誤ったスローガンによってだまされ、まどわされていたことに」気づいて蜂起したと言われています。水兵たちは生活のあらゆる分野が革命政府によって官僚的・独断的に再編される状況に直面し、ボリシェヴィキ政府というものは「友愛の仮面をかぶって労働者大衆の新しい敵が権力の座についていることに」気づいたというわけです。[3]

いま私たちにできることは、いつか到来する「革命」のときを待ち望むのではなく、日常生活のレベルから自由と平等を実現するために少しでも抵抗することではないでしょうか。いま目の前に存在するあらゆる抑圧に対して抵抗を継続することこそが、自由を勝ち取るための近道となります。そして自由を獲得するための日常的な抵抗はやがて不平等な社会を変革し、私たちがより豊かな生活を送ることができるようになるでしょう。このように「下から」の

3　ヴォーリン（野田茂徳・野田千香子訳）『知られざる革命 クロンシュタット反乱とマフノ革命』（現代思潮社、一九六六年）二九頁

平等を実現するためには、「自由と抵抗」こそが重要なテーマになるのではないかと思うのです。「自由と抵抗」のためには、必ずしも社会全体や政治情勢を揺るがすような大規模に組織された直接行動や「革命運動」は必要ありません。それはもっと私たちの日常生活のあらゆる側面に存在しています。権威主義的なルールに従うことを拒否する、職場や学校における不当な慣行やハラスメントを告発する、既存の価値観や権力に反するようなアートや文化やライフスタイルを作り出す、といった具合に。そのように各々のできる範囲で抑圧に対する抵抗を作り上げていくことこそが、私たちが自由を勝ち取るための一歩なのではないでしょうか。『黒煙』は、そのように日常生活から「自由と抵抗」を実践していくためのヒントとなるような雑誌にしていきたいと思っています

『黒煙』の名前

この雑誌は『黒煙』という名前です。これに込められた意図について説明したいと思います。

①工場やゴミ焼却場から立ち昇る煙のように、「黒煙」とは規律化と消費社会化が進んでいる現代文明社会を表すものです。多くの労働者は過酷な労働環境や低賃金に生活が脅かされ、資本主義的生産様式にあわせて規律化されています。資本主義に適合して働かなければ生きていけないという、大企業や資本家によって実質的な生殺与奪の権が握られているわけです。一方で、そのようにして安価に生産される製品は「大量生産・大量消費」で使い捨てられ、生産物が市場に出回るサイクルを加速度的に増やさなければグローバル資本主義が延命できないような状況になっています。その結果として大量の廃棄物や二酸化炭素の排出が問題となり、気候変動や化石燃料の枯渇すらも危惧されています。現代文明社会における「黒煙」とは、現代に生きる私たちへの抑圧的構造のメタファーである

と考えると、何も持たざる者である私たちこそが「黒煙」という言葉の主導権を取り戻したいものです。

②「黒煙」は時に狼煙としても使われることがあります。狼煙とは遠くに合図や警報を発するための古典的な連絡手段であり、被抑圧者が反撃に転じるときの比喩としても使われるわけです。可燃物に火を点けて煙をあげるように、いままで不可視とされてきた抑圧や差別に対して反撃するためには、それを可視化するための段階が必要となります。残念なことに現代社会では、女性や性的マイノリティといった人々に対して、あるいは人種や国籍やアビリティの違いを理由として、あらゆる社会的抑圧が日常生活に潜んでいます。そのような抑圧は「○○はこのようにあるべき」だとか、「○○はこうに違いない」といった先入観や偏見によって更に強化され、被抑圧者を縛り上げる鉄鎖となるわけです。そのように多数派によって見過ごされがちな問題を顕在化させて浮かび上がらせる、そして多数派によって築かれてきた既存秩序や既成概念に基づく抑圧的構造を焼き尽くすために、私たちは破壊的な「黒煙」を焚かなければなりません。

③ラディカルなデモや暴動では、タイヤや車が燃やされることが頻繁に見られます。本誌の表紙に使用されている写真も、インドネシアのマカッサルという街で行われたデモの写真です。煙をあげて燃え上がるものがあると現場に混乱を生じさせ、抗議デモ参加者の怒りや不満を視覚的に表現するために役に立ちます。また燃えるタイヤや投げられる火炎瓶はバリケードの役割も果たし、警察や軍が攻撃してくることから抗議者を防衛することにもつながります。狼煙を焚くように遠くからでもデモの存在を知らせることができ、野次馬に次ぐ野次馬が集まることで更に混乱はエスカレートするでしょう。なにより、警察車両や政府関係者の車を横転させて火を放つという行為は、抗議者の怒りや敵対性を明確に示す非和解的で不退転的な闘いであることを意味します。本来デモというのは権力者に「お願い」「請願」するものではなく、これ以上野放図に暴れるやつらが現れるとどうなるかわからないという

混乱を生じさせるものであると考えると、「黒煙」をあげるということは、ラディカルな蜂起を予期させる象徴的な示威のあり方なのではないでしょうか。

④そもそも煙とは不定形なものであり、常に形を変えながら立ち昇るものです。ブルース・リーは武術の哲学として、自在に形を変えて動き、時には破壊的な力を持つ水にたとえて、「水になれ（BeWater）」と言いました。このスローガンは二〇一九年香港民主化デモの精神的な支柱になりました――すなわち特定のリーダーに指導されるのではなく、匿名の抗議者たちのネットワークによって臨機応変に移動を続け、警察と衝突すればすぐに姿をくらまし、また別の場所でデモを起こすといった具合に。常に流動的に姿を変えて動き続けるという点では、水も煙も同じような意味合いを持ちます。そして煙は水と違って清浄なものではなく、時には有害物質や悪臭を拡散させるからこそ、生きるエネルギーや力強い意志を私たちに与えてくれるものです。抑圧に対して抵抗するのであれば、状況にあわせて変幻自在に姿を変えながら広がり続ける、そして何者の手にも掴むことができない「黒煙」をイメージしたいものです。

おわりに

これはあくまでも「雑誌」であり、「批評誌」や「文芸誌」や「理論誌」ではありません。小難しい歴史の話や哲学的議論ばかり重ねたいわけではなく、もっと社会に対して「雑」に抵抗するための話を中心としたいと思っています。それはアナーキズムの思想が知識人による議論から生まれたのではなく、庶民の生活のなかから発見されたものであるということと同様です。高踏で難解な話がしたい人たちはそれはそれでいいのですが、本誌ではもっと身近な

語りこそが大切なのではないかと思うのです。

かく言う自分も散々ここまでアナーキズムの思想のような話をしてきましたが、「自由と抵抗」の共通テーマさえ同意するならば、思想や信条の有無にかかわらず様々な人の語りを掲載していけたらと思っています。強くて急進的な思想を持っているとか、これまでどれほどラディカルな直接行動に参加したことがあるとかいった違いによって、「自由と抵抗」が一義的に決められることは民主的ではありません。もっと私たちの何気ない日常生活のなかにでも、そのような萌芽はきっと存在するはずです。

現代を見ていると、皆が社会に対して漠然と鬱憤を抱えて生きているにもかかわらずその発散のやり方がわからずに、バッシングや嘲笑の矛先が社会的弱者に対して向かったり、差別的・攻撃的な言動をしているインフルエンサーに心酔したりしている人があまりにも多いように思います。そのように権威主義的になるのではなく、もっと私たちの暮らしに根差したところから抑圧に対して「ふざけんな！」と言える方が遥かに健全なのではないでしょうか。「自由と抵抗」というのは、そういうところからスタートするものではないかと期待しています。

太田やくーと
2000年生まれ。大阪・京都を拠点として、横断的に活動している自称アナーキスト。「東シベリア集団」の主催者であり管理人。相互扶助や自治の実践に関心アリ。アナーキストのネットワークを作りたい。

立命館大学「山上義士」ビラ 首謀者インタビュー

立命館民主主義研究会

はじめに

二〇二二年七月八日に近鉄大和西大寺駅前のロータリーにて、参議院選挙のため応援演説を行っていた安倍晋三が山上徹也の手製銃にて銃撃され、死亡するという事件が起きたことはまだ記憶に新しいところだろう。この事件は選挙演説中に白昼堂々と、それも長期にわたる首相経験者が射殺されるという前代未聞の出来事であり、日本国内どころか世界中に震撼を轟かせた。事件については直後から現在に至るまで文字通り右から左まで様々な意見が飛び交っているが、いまここでそれを詳しく掘り下げることはしない。

この事件に関連して、立命館大学でもインターネット上に物議を醸した「事件」が起きた。事件発生から六日が経過した七月一四日に、学内数か所にとあるビラが貼られていたのが発見されたのである。そのビラは銃撃されて仰向けに倒れ、支援者に救護される安倍晋三の白黒写真とともに「安倍晋三射殺決起万才！山上義士を顕彰しよう！」と大文字で書かれ、事件を「腐敗政治への革命的テロル─7・8単独決起」として称賛するという内容であった。この異常すぎるビラを発見した当会メンバーが画像つきで当会Twitterに投稿したところ瞬く間に拡散され、RT数は二千を超えてJ-CASTニュース[1]にも取り上げられるなど、さながら「炎上」の様相を呈した。当会の活動と結びつけて「自作自演」であるという誹謗中傷も相次ぎ、当会もがこの投稿を削除し声明文を発表せざるを得ない状況にまで陥った。

1　J-CASTニュース『「山上義士を顕彰しよう！」立命館大に「テロ礼賛ビラ」 大学側「公序良俗に反する」と撤去』(2022/07/15) https://www.j-cast.com/2022/07/15441870.html

安倍晋三射殺決起万才！
山上義士を顕彰しよう！
安倍政権のもとでどれだけの不祥事が隠蔽され、民主主義は破壊され、軍国主義化が進み、労働者が職を失い、経済的格差が広げられ、国内外に差別が扇動され、マイノリティの人々が辱められただろうか。
安倍は名もなき市民によって殺された。これは安倍が引き起こした社会的混乱への落とし前として当然だ。
今こそ腐敗政治への革命的テロル—７・８単独決起を断固支持し、山上義士の名を民衆で語り継ごう！

この「事件」から約半年が経過した二〇二三年一月下旬、当会Twitterのダイレクトメッセージにこのビラを貼ったという「難波大助」を名乗る人物から連絡があった。ビラのデータ原本を所有していることやビラを貼った位置を覚えていることなど、状況的には本人であると類推できる人物であった。そこで急遽本会はこの人物にインタビューを行い、ビラを作成し貼った経緯や安倍晋三銃撃事件に関する話を本誌にて掲載することとした。[2]

1. 「テロリズムが好きな普通の日本人」という人物の語る「民主主義の危機」

——本日はよろしくお願いします。立命館民主主義研究会というサークルの会長をやっています。

難波：よろしくお願いします。一応ここでは、難波大助という名前で。

——難波大助というと虎ノ門事件で当時は皇太子だった昭和天皇を暗殺しようとした、あの人ですよね。

難波：日本人テロリストのなかでも特に好きなんですよね。少なくとも戦後には皇族を狙うという点では彼を超えるテロリストは存在しませんし。

——まあ、その名前を深くは追及しません。ところで学年とか学部とかうかがっても構いませんか。

難波：そこはまあ、秘密ということで。というか立命館大学関係者であるかどうかも秘密にしておきます。とりあえずはテロリズムが好きな普通の日本人かな。

——テロリズムが好きとは、とても反社会的な思想をお持ちのようで。暴力革命を志向する新左翼党派があっても、「テロリズム」という言葉自体は忌避される傾向にあると思います。ところでこの事件はあくまでも「私的な闘い」であって「テロ」ではないという見方もあると思いますが、そこは後々話を掘り下げましょう。テ

2　インタビューは二〇二三年二月にオンライン上にて実施された。

ロリズムが好きという難波さんは普段、なにか活動をされているんですか。

難波：特に表に出てなにかする、たとえばデモに参加するとかいったことはしていませんね。ネット掲示板で日本をバカにする書き込みをするとか、オンラインコミュニティで政治家やネトウヨをバカにするネタを貼るとか、そんなところです。

――「ニュー速嫌儲」とか。

難波：そんなところです。あとはRedditとか。普段はネット上だけなので、貼り紙をするという行為をしたのもこれが初めてですね。

――では本題に移りますが、なぜインターネット上での活動のみならず実際に大学のキャンパス内に、それも複数箇所にビラを貼ろうと思ったのですか。現実に行動に移そうとした経緯や理由についてお聞かせいただければ。

難波：理由としては、事件を受けて皆が口を揃えて「民主主義の危機」とかおかしなことを言い始めるようになったことが大きいです。選挙演説中に撃たれたということだけで民主主義や言論の自由と結びつけて論じる傾向は自民党だけでなく、野党関係者も一様でしたよね。こうした論調は当時のネット上でも大多数を占めており、これはつまらないなあと感じていました。そこで山上さんのように直接行動によって実社会に影響を及ぼす方法を考えると、大学にビラを貼るということを選択したわけです。特に立命館の仲谷総長が大学公式サイトで「民主主義の根幹を揺るがす」とか言っていましたし。

――統一教会問題などが明らかになったいまでこそ「民主主義の危機」「民主主義への挑戦」という言葉とは関係ないと言う人も出てきてはいますが、当時は誰もがそのように言っていましたしね。

難波：あくまでもこれは統一教会による宗教二世問題の延長であって、山上さん本人は民主主義そのものを揺るがすことを企図していたわけではなかったんですから。ああ、そういう意味では「私的な闘い」です。しかし、むしろ民主主義を壊してきたのは安倍政権であり安倍本人であって、それは統一教会と政治の癒着というこ

とに現れているわけですね。でも選挙が終わるまでメディアは統一教会問題について触れようとしていなかったし、ましてや「民主主義の危機」言説に異論を唱えようものなら山上さんの同調者だと決めつけかねない風潮を作っていた。まあ、ある意味同調者なので間違ってはいないんですけど。

――ビラの下部の文章には「安倍政権のもとでどれだけの不祥事が隠蔽され、民主主義は破壊され」とか「マイノリティの人々が辱められた」などと列挙されていたのが印象的でした。それも安倍政権こそが民主主義の敵であり、「民主主義の危機」言説に対して異議を唱えたかったということですか。

難波：まあ下の文章はあまり深く考えて作っていないんですけど、特に第二次安倍政権がやってきたことは酷かったですよね。集団的自衛権の閣議決定に安保法制の強行採決、森友加計問題など挙げていけばいくらでもキリのないことですが。明らかに政治が安倍政権によって腐敗して民主主義が蔑ろにされてきたのに、撃たれて死んだだけで反民主主義的な人物によって、いわばまさに民主主義に「殉職」したかのような筋書きはおかしいと思ったからです。むしろ山上さんの銃弾によって民主主義とは何かを改めて考える契機となればいいなと思っていました。

――民主主義の腐敗の象徴たる人物が白昼堂々と、「名もなき市民」によって射殺されるという事態に「革命的テロル」を見いだしたというわけですね。しかしそれは先ほど難波さんが言っておられた、事件は「宗教二世問題の延長」でしかないということと相反するような気がします。

難波：言ってしまえば私は、山上さんの直接的動機はさほどどうでもいいわけです。山上さんの直接的動機は家庭を崩壊させた統一教会に対する復讐ですけど、そこで安倍が狙われる原因は安倍が統一教会と持ちつ持たれつのズブズブな関係にあったからですよね。そこは麻生でも菅でも岸田でもなく、安倍でなくてはならなかった。となるとやはり山上さんの銃弾は、カルト宗教と癒着するまでに腐敗した日本の民主主義を再考するためのバタフライエフェクトを引き起こした。ですから山上さんのパーソナリティをあれこれ考えるよりも、「テロ

リスト」としての結果を評価する方が正しいと思ったんです。言い換えるとするならば、「7・8決起」をどのように活用するかということですね。

――宗教二世問題、自民党と統一教会の癒着、民主主義と政治の腐敗は地続きであるということですね。矢部史郎さんも自身のブログで事件翌日には「反民主主義を極めた日本社会に対して、言論の回復と民主主義の復権を求めて、（山上氏のように政治家の前に）カーゴパンツで登場しよう[3]」と書いていました。いまこそ民主主義の再生のために山上氏のした「テロ」を考え直さねばならないということですか。

難波：まあ、そういう意味で腐敗した民主主義を再考するきっかけになったという点では「民主主義の危機」ではあるのかもしれませんね。いままでのクソみたいな民主主義の中で甘い汁を吸ってきた政治家にとっては悪夢のような出来事でしょう。少なくともそういった連中の言う「民主主義の危機」というジャーゴンには中指を立てながら、でも民主主義を取り戻す試みが7・8以降は必要になっていると思いますね。ですからビラではシンボリックに「山上義士を顕彰しよう」と煽ったわけです。

2．権威主義を克服するために「底知れぬ悪意と不謹慎さを感じればいい」

――ここまでで、山上氏の意思とは無関係に、彼の行為が及ぼしたバタフライエフェクトによってどのように民主主義を取り戻すか考えることが必要となるという話をしてきたわけですが、具体的な方法などは考えておられますか。

難波：それこそあのビラのような手法ですよね。当時は「安倍が死んだ万歳」と言うことさえ憚られるような空気感

3　「原子力都市と海賊」『山上氏のようにカーゴパンツを』(2022/07/09)　http://piratecom.blogspot.com/2022/07/blog-post_9.html

に満ち溢れていました。今でこそそういう書き込みも結構見ますけど、当時のインターネットでそんなことを言えばただの頭のおかしな奴としてスルーされて終わりか、めちゃくちゃ顰蹙を買ってバッシングを受けるか、どちらかだったわけです。そこでただのネット上の書き込みの一つではない、一個人が作ったビラとしてそういうある種不謹慎なビラを貼ることで、「ああ、別に安倍が死んだことを喜んでもいいんだ」という空気感を醸造することができたのではないかと思います。願わくばああいうビラを色んな人が作って貼り始めたらもっと面白いですね。ビラをどこかに貼るなんて誰にでもすぐ出来ることなんだから。

――確かに当時あのビラの写真をツイートしたら、当会までもがとんでもないデマと中傷の嵐に遭いました。あの時は一体化したネット世論が集団になって襲い掛かってくることの恐怖を味わいました。

難波：まあそこは、ご愁傷様ですとしか。私は別にネットに拡散されなくても、実際にビラを目にした人が底知れぬ悪意と不謹慎さを感じればいいやとしか思っていなかったんですけど、Twitter であそこまで広まったらそれはそれで予想より大きな影響を及ぼしたんじゃないかなあと思いますね。そういう点では感謝しています。当初はクソみたいな大学のキャンパスに悪意が広がればいいとしか考えていませんでした。

――「悪意と不謹慎さを感じればいい」とまで断言するならば、あそこまでセンシティブなビラが多くの人に許容されることはほとんどあり得なかったでしょうとは思います。今でこそちらほらあのビラを評価する意見も耳にしたりはするのですが、それでも表立っては言いにくいところです。

難波：あんな腐敗政治の象徴のような男がぶっ殺されるって喜劇でしかないと思っているんですが、なかなか人前でそんなことを言えませんよね。やはり日本人の権威主義的な性格が表れていると思います。サッチャーが死んだときにイギリス人はパーティーして盛り上がっていたのに。もっと権力者の死をもてあそんで、バカにすることができるような風潮を作ることこそが、まともな民主主義を取り戻すための第一歩になるのではないかと思います。ですから悪意を込めたビラで不謹慎さを刺激することによって、むしろそういった方向に

引き込めるのではないかなと。いわばまさに、プロパガンダであります。

――確かに社会的弱者やマイノリティが痛めつけられ、時には死ぬこともある状況には日本人は冷笑的で無関心なのに、安倍晋三や昭和天皇の死のようなスペクタクルな出来事にはショックを受けて悲しむ傾向にあると思います。そういった感覚のベクトルを違う方向に向けるために、あえて悪意のある方法を選ぶということですか。

難波：日本では「長い物には巻かれろ」という気質が充満していますよね。そういう権威主義的パーソナリティは、まさしくエーリッヒ・フロムが言ったように自己より弱い立場の者に対する攻撃となって表出するわけです。そうではなく権威に対して立ち向かえ、権力者を徹底的に虚仮にしようとアピールするためには、生半可な言い方では通用しないでしょう。いくらそう優しく説得しようったって、結局は日本に浸みこんだ病理が治ることはない。だから安倍が撃たれた写真をビラに使って、「山上義士」のように反感を買う過激な言葉をあえて使うことが、こちらからのプロパガンダになるんじゃないかなと。

――別にフロムは権威主義的パーソナリティを克服するために不謹慎ネタに走れとは言っていない気はしますけど。まあでも「お上に逆らうな」という硬直化した思考をほぐすためには、ある程度そういう不謹慎なベクトルが必要なのかもしれません。こういう不謹慎さではないですが、かつてのオッペケペー節とかも制限された言論の中で世相を風刺のネタにして評判を博していましたしね。

難波：とはいえ、いまの左派がそういう不謹慎さを導入することはなかなか難しい。社会運動で悪意のある不謹慎なことを言ったら外部からのみならず、内部からも批判は免れないでしょう。それは社会運動という大衆性をもった行動だから致し方ないことですし、むしろそういうところで「山上義士」とか揶揄していたらいつまで経っても支持は得られないだろうし。『REVOLUTION+1』の足立監督はそういう点では突き抜けていて良いなと思いますけどね。支持を集めることとプロパガンダは違う。

――確かに左派は徹頭徹尾倫理的であろうとして「真面目」であり続けてきた結果、保守のように民族的団結、外国人や性的マイノリティに対する差別排外を主張する非倫理的感情に訴える運動どころか、反ワクチンやQアノンのような陰謀論者にまで足元をすくわれようとしている気はします。しかし左派が支持を拡大するためには地道に活動を続けるほかなく、表向きに「山上義士」ビラのような路線を取ってしまえばむしろ大衆からの乖離を招くでしょうね。

難波：ですから、大衆の支持を受けるべき左派がこれをやっちゃいけない。世の中の大多数の人はそういう不謹慎なものは嫌いです。それこそ「お上に盾突く」ような不謹慎は。でも社会運動の外縁にあるアンダーグラウンドで匿名な個人的領域でこういうことをやってみて、ごく少数でもいいからノってくる人の輪が拡大していけば、自然とそういう方向性になるんじゃないかなと。不謹慎という感情は連鎖的に伝播するものだと思うので、いままで眉をひそめていた人に「別にこういうこと言ってもいいんだ」と思わせたらそれで勝ちです。つまり多くの人に受け入れられるのではなく、どこかにいる不謹慎なバイブスを共有する人を刺激するためです。世の半分の人に支持される社会運動よりも、数パーセントの同調者を生み出すプロパガンダの方が面白いんじゃないかなと。

――あくまでも不謹慎ビラは個人的な領域であって、社会運動には直接結び付かないということですね。ところで奇しくも難波さんがビラを貼った14日に岸田首相が国葬を取り行うことを発表しました。国葬を巡ってはさすがに世論も反対が多数で、国葬反対運動が日本各地で取り組まれました。そこについてどのように考えておられますか。

難波：国葬が発表されたときに、このままではもしかしたら挙国一致となって国葬ムードに突入するのではないかという危機感を抱きました。そのときはもっと不謹慎なプロパガンダによって抵抗しないといけないなと。思いのほかそうはならなかったのは、統一教会問題が明らかになり山上さんの行為に一定の正当性を感じる人

が多少は出てきていたこと、強硬的に国葬に向けた準備を進める岸田政権にさすがに多くの人が疑問を抱いたことは大きかったと思います。それも弔意を強制してくる日本政府に対してある種の悪意と不謹慎さで抵抗できる萌芽なのではないかとちょっと期待しましたね。

――国葬をすることについては、さすがに安倍晋三への個人崇拝が行き過ぎているだろうと感じる人も多かったでしょうね。国葬関連で思い出すとすると、国葬当日に反対デモの「国葬射的」[4]が話題になりました。これも難波さんの言われる「悪意と不謹慎」を表すものだと思いますが、いかがですか。

難波：まあ面白い試みではあるとは思いますが、あれを抗議デモに合わせてやるのは普通にナンセンスと言わざるを得ないですね。先ほど言った通り、ああいった大衆運動はまともな人たちから支持を得られなければあまり意味がない。そこで不謹慎イベントをやるのはただ足を引っ張っているだけ、敵のつけ入る隙を作るだけとしか思えませんよ。やるならば別の場所で独自にイベントを開催すべきだったです。

3.「テロリズム」という言葉をめぐる政治性とこれからの展望

――そろそろまとめに入りましょう。先ほどからたびたび「プロパガンダ」という言葉が出てきているのでそれに関連して考えてみると、山上氏の行動は十九世紀以来のアナキストの戦略である「行為によるプロパガンダ」の系譜にあると五井健太郎さんとかは述べていますね。[5] つまり要人を暗殺したり要所を爆破したりする行為によって主張を世の中に知らしめる戦略であると。歴史的に「行為によるプロパガンダ」は広く受け入れら

4　国葬当日の抗議デモ出発地点の公園で安倍晋三の写真を的にした射的大会が、抗議デモの最中に安倍晋三の顔写真をプリントしたシャツに向けて水鉄砲を発射するパフォーマンスが行われた。

5　五井健太郎「散弾銃から超現実へ―アナキズムとシュルレアリスムから考える現在」『月刊アナキズム』第29号、四頁

れず、大弾圧を招いて運動がバラバラになってしまうなど、うまくいかなかったわけです。しかし一方で「行為によるプロパガンダ」は運動の外縁にいた文学者や芸術家には受けとめられた。これを現在的な文脈で考えてみるといかがですか。

難波：自分が最初にテロリズムが好きだといったのは、まさしくそういう点です。ロシアのアレクサンドル２世は『人民の意志』という過激派テロリストグループに暗殺されたわけですが、彼らの意図するところは人民に「皇帝でも俺たちの手で殺すことができるんだ」という価値観を植え付けることで反乱を起こさせようとしていたことにあった。「テロリズム」の魅力はそういう大きな影響を後の世代に与えることができることにあります。つまりそのときは組織が壊滅しても、「テロ」に秘められた意志は自立して歩き始めるんですね。「行為によるプロパガンダ」だってその当時はアナキズム運動に退潮を招いたでしょうが、それがプロパガンダである限り誰かの記憶には残り続けたでしょう。山上さんの行動を単なる「私怨による殺人」と言い切ってしまえばそれで終わりですが、それを私たちが後付けで意味を与えていく。山上さんにカンパの支援金が何百万円も集まっているのを見ると、彼の行動に自分なりの意味を見いだして評価している人が少なからずいることを意味しているでしょうね。

――「テロリズム」を単なる暴力によって目的を遂行する手段として捉えるのではなく、それ自体がプロパガンダであり抵抗であるということですね。だから山上氏のこともあえて「テロリスト」と呼ぶということですか。

難波：「テロリズム」といっても、「正しいテロ」と「そうでないテロ」があります。私はあらゆるテロを支持しているわけではありません。銃乱射や爆弾テロのように無関係な一般市民を無差別に殺傷することは許されないし、そういうテロは好きではありません。ましてやテロリズムの原義である暴力による恐怖政治なんてもってのほかです。そうではなく、抑圧者や権力者に向かって怒りが爆発するようなテロリズムこそが正しいと思うので、そういうのが好きです。山上さんは無関係な人を巻き込まず、安倍だけを殺した。なんと「正し

いテロ」でしょうか。

――一般的に「テロリズム」が良い意味で使われることはありませんよね。権力者は「テロとの戦い」「対テロ戦争」という言葉を使って、人びとを恐怖に陥れる「テロリスト」に対して自分たちは立ち向かう正義の戦いをしているんだと擦り込ませ、管理社会化を進めていく。非暴力であろうと「テロリスト」という烙印が押されてしまえば、危険人物であるかのような認識を持たれてしまう。権力者によってとても恣意的に使われる言葉だと思いますし、事件当初は「民主主義の危機」キャンペーンのもと山上氏を「テロリスト」に仕立て上げて「テロリズムを許さない」という定式のもとに我々の自由が制限されようとしていた。やはり「テロリズム」という言葉を安易に使うことは危険だと思います。

難波：うーん、そこはやっぱり難しいですよね。権力者によって「テロリズム」という言葉が濫用され過ぎていることが問題なのでしょうけど、言葉の持つ政治性のヘゲモニーは依然として向こうに握られたままです。私はもっと「テロリズム」という言葉が肯定的に使われるようになればいいなと思います。いわばまさに、「テロの民主化」であります。

――しかし「民主的なテロリズム」というのが存在するのか、疑問の残るところではあります。誰かに向かって暴力を行使するという構造自体がそもそも非民主的なわけですから。そういう意味では、近代国民国家が暴力の独占のための装置である以上は真に民主的な国家というものは存在しないことになりますし、同様に「民主的なテロリズム」も語義矛盾を起こしていることになります。

難波：もちろん理想を言えば暴力もテロも存在しない、民主的な社会が実現できることが一番です。そういう理想を追求するアナキズムを否定することはできませんが、とはいえ今の権力関係のもとでどのように反撃することができるか。まずはそれを考えたときに「テロリズム」という言葉を私たちこそが恣意的に使えるようになるといいのではないかなと思います。ですから「テロリズム」という言葉のヘゲモニーを奪還しなければ

ならない。そこであえて山上さんを「テロリスト」と祭り上げるのです。

――陳腐な言い方ですが、暴力に暴力で対抗しても解決しない。権力に対してテロで対抗しても、更なる規制強化と弾圧を招くどころか求心力だって失ってしまうかもしれない。それでも正しい「テロ」があるということですか。

難波：そこが社会変革を目指す人と、あくまでも個人的領域にとどまる人の違いですよね。私だって真に社会を変革するのであれば、非暴力であるべきだと思うし「テロ」なんてもってのほかだと思います。暴力によって政権を打ち倒したとしても更なる暴力的な権力が待っているだけですからね。しかしここで言いたいのはそんな難儀な話ではなく、現状の支配関係の転覆を狙わない、個人の怒りの発露としての「テロ」が頻発するのも革命的だよねということです。つまり「テロリズム」は手段ではなく目的であり、その結果としてどういうプロパガンダにつなげることができるか。そこが重要なのではないかなと。

――なるほど、社会変革を目的とするためにテロを手段とするのではなく、「テロリズム」そのものが抑圧された個人や集団の暴力的抵抗としての意義があると。そして第三者がそれに意味を付け加えていくという役割を果たすということですか。

難波：ですから、あくまでも私は第三者の視点に立って「テロ」をあれこれ論評しているだけなので、真に「テロリスト」の気持ちはわからないんです。とても卑劣なことをしているなと自覚はしているんですが。それで言うと、いわゆる「無敵の人」が女性や子供を狙って殺傷したりするのもある種の「テロ」ですよね。社会的諸関係のなかで抑圧され、悪政の犠牲者として「無敵の人」が現れるわけです。言ってしまえばルンペンプロレタリアートですよ。しかし「無敵の人」は敵を見誤っていて正しくないですし、社会的弱者を狙うことは許されることではありません。その一方でたまに警察官を殺傷する事件がありますよね。二〇一八年の仙台の交番襲撃事件とか、二〇一九年の吹田の千里山交番襲撃事件とか。ああいうのは正しい「テロ」だなと

思いますね。

――どちらも社会通俗的に許される事件ではないとは思いますが、要するに権力に向かって発揮される「テロ」には同情を感じるというわけですね。これはれっきとしたテロですが、革労協の警察寮爆破事件とかは。

難波：当然好きです。連合赤軍も同志殺しは許されることではありませんが、機動隊を殲滅したのはよくやったと思いますね。まあ要するに、「敵を見誤るなよ」ということです。敵は女子供でも、障害を抱えている人でもない。狙うべきは天皇であり、安倍晋三であり、もっと身近な例でいえばそこら中にいる末端の警察官なわけです。そういった権力による抑圧に向かって怒りの「テロ」が頻発する世の中になれば、もっと面白いし市民社会そのものを揺るがすパワーになり得ると思いますね。

――うーん、なんだか不穏な話になってきたな。それでは最後に、これからの「テロリズム」の展望をお聞かせください。

難波：展望と言うほど大げさなものではないですが、山上さんの成功事例は、恐らくこれからの「無敵の人」の行動パターンを変容させるものなのではないかと思います。通り魔や無差別殺傷よりも、より社会にインパクトを与えることができる術であると。いままでの「無敵の人」は、非正規雇用労働者で社会的に不安定な立場に立たされている限界な人が、死刑を受けることを目的として凶行を繰り返すという事例が多かったように思います。それは映画になぞらえて「ジョーカー」とも呼ばれたし、それを模倣する事件も発生したわけです。つまり動機自体はどこまでも個人的な鬱憤や恨みであって、原義的な「テロリズム」ではない。しかしこの「7・8決起」は単なる無差別殺人者になるはずだった人を「テロリスト」へと変容させる影響を及ぼす、つまり「本当の敵」は誰なのか気づくようにエンパワメントするものになるのではないかと考えています。

――いままでは京王線や小田急線で凶行に走った人たちのように「ジョーカー」と呼ばれるような事件が、今後は「本当の敵」、つまり政治家や権力者へと向くことを予想しているということですね。それは単なる鬱憤晴ら

しであっても「テロリズム」へと昇華するポテンシャルを秘めた犯罪行為であると。

難波：ですから、結局のところ「テロリズム」という言葉や概念が今後どのように扱われるかということに関心があるわけです。つまり、既存の権力構造や社会秩序を問い直すきっかけとして、誰かの意識に火を点ける可能性のある言葉であると。そのことが結果として「テロリズム」の伝播を生み、次の「テロ」が準備されることも考えられる。そのような状況になると、無差別殺傷事件の予備軍であるような「無敵の人」のみならず、政権や政治に不満を持つ人でさえもカジュアルに「テロ」に決起するような世の中になるんじゃないかと思います。

――なるほど。「テロリズム」が新たな反発の手段として、ある種の「民主化」された抗議の形式になり得るということですね。その場合、「テロリズム」という概念そのものが社会にどのような影響を与え、変質するかも議論が必要になってきます。

難波：その通りです。そうした危険性についての懸念も理解しています。時として権力側にとっての「テロ」の概念は非常に恣意的であり、体制維持に寄与する役割を果たしている点が問題なのです。権力側は「テロリズム」を自らに不都合な反発すべてを抑え込むための便利なラベルとして利用し、それを「危険なもの」として市民に教え込みます。しかし私が興味を持っているのは、「テロリズム」という言葉がどう社会で再定義され得るか、体制側と抵抗者の間でどのような価値観の衝突が生まれるのかという点です。結果として、体制批判をどのように展開していくのかを再考するための契機となる可能性があるのではないかと思います。そのうえで匿名の個人として、私たちは「テロリズム」をどのようにプロパガンダ的に活用していくか。更なる「テロ」を喚起するためには、どのような土壌を用意せねばならないか。これが今後の展望なのではないでしょうか。

――「テロリズム」という言葉を単なる破壊的行為としてだけでなく、政治や社会の矛盾をあぶり出す手段としてどう捉えるか。それが問い直されているわけですね。それは一方的な暴力の是非ではなく、抑圧される側が

どう言葉を奪還していくか、どう意味を与えていくかという話に結びついてくるのではないかと思います。それでは長い時間でしたが、ありがとうございました。

難波：ありがとうございました。

インタビューを終えて

「はじめに」及びインタビューそのものは二〇二三年二月に書かれたものであるため、約二年が経過した現在とは少し状況が違う部分も多い。この文章がいままで放置されていたのは、そのような状況下において適切に発表できる媒体が存在しなかったからである。

さて、それだけの月日が経過したからこそ見えてくるものもあるのではないか。統一教会問題は次々に明らかになり、解散命令請求の議論が進んでいる。安倍晋三という保守派の柱がいなくなった自民党は依然として迷走を続けており、岸田政権から石破政権へと支持率の低さが顕著になっている。いわゆる「裏金議員」問題も安倍晋三亡きあとに注目されることとなり、不十分ながらも安倍派のなかではまかり通っていた汚職に対する追及は続いている。安倍晋三の銃撃を受けて「民主主義の危機」があれこれ取り沙汰された割には、結果的に政権へのダメージにつながっているようだ。

とはいえ、この当時とはまた異なった状況における問題が浮上しているのも確かである。兵庫県知事の斎藤が典型的なように、いくら政治家によるパワハラや法令違反が相次いでも盲目的な支持者たちには「既得権益からの攻撃」としか映らず、むしろ結束を強めるといった状況が各所で見られる。めちゃくちゃなことをした政治家でも再選さえすれば「禊が済んだ」と見なされ、厚顔無恥に権力の座にしがみつき続ける。あるいは極右陰謀論者や差別主義者が

ますます増長し、社会の分断が深刻な問題になっている。こういうモラルハザードが蔓延しているのも、安倍政権がもたらした政治的腐敗が根底にあるだろう。自民党への不信感が増したところで、大して社会が良くなっているわけではない。

一方でインタビュー中で着目していた「テロリスト」の側はどのように変わっただろうか。特筆すべきは、二〇二三年四月に起きた岸田文雄襲撃事件がある。安倍晋三の射殺からそれほど間もない時期に起きた爆弾テロ未遂は、恐らく山上の決起に影響を受けたものなのではないか。実行者は二〇二五年一月現在でも黙秘を続けているという。山上の動機が統一教会に対する復讐というあくまでも個人的な闘いであるならば、こちらの例は明確に政治的信条に基づいた「テロリズム」である。少しずつではあるが、インタビュー内で話したようなことが現実のものになりつつあるとも考えられるだろう。

そしてそのような決起者は「ローンオフェンダー」と命名され、警視庁公安部を動かすに至った。いままでは新左翼対応をしていた公安一課と二課が統合されて新・公安一課へ、右翼対応をしていた公安三課が新・公安二課へ。そしてこの「ローンオフェンダー」が新・公安三課の対応となるところになる。いまの新左翼党派の凋落を見ていれば現実にテロを起こす危険性などはもはや存在し得ないし、公安警察なんてものはただの嫌がらせのようなでっち上げ弾圧を繰り返して予算を獲得するにすぎない組織であるということは、容易に想像がつくだろう。そんな人民の敵である公安警察のリソースを少しでも割くことに成功したという点で、既に「テロリスト」は目的を達成しているとも言える。

いささか難波氏の発言はニヒリズム的であり、斜に構えたような発言が多いようには感じる。しかし実際のところ、左翼がいくら「良いこと」を言っていたところで、社会はそう良い方向には動かないものである。階級闘争を主張したところで日本の労働者に階級意識が目覚めることはないし、戦争反対を主張したところでガザの虐殺は終わらない。いくら不正義や不平等がまかり通っていても目先にいる人々の足を引っ張り合うだけで、権力に対してその矛先が向

くことはあり得ない。もはやこのような状況で大衆的に運動を作り上げるようなことは幻想と考えてしまうのも無理はないはずである。これでも「テロリスト」に期待を寄せてしまうことを理解できないのは、あまりにも理想主義的すぎるのではないか。

とはいえ私たちは「テロリスト」ではない以上、地道に運動を組織していくほかにできることは少ない。そんな状況において、時おり現れる「無敵の人」に対する視線をどのように捉えなおすか。単なる凶悪な犯罪行為として断罪するのではなく、そのなかにある思想をどのように掬い取るか。このような課題についてのヒントとして、最後に永山則夫の言葉を引用して終わりたい。

在日朝鮮人民の青少年諸君よ！
第二の李珍宇に成れ！
第一のそれの実践者と言うべく金嬉老に成れ！
しかし、忘れるな！
これだけは肝に銘じておけ、敵は珍宇の殺ったような、
私の殺ったような罪の全くないという人ではないぞということを！
敵はブルジョアジーだ！フカフカイスにふんぞりかえっている
企業ブルジョアジーの手先たる政治屋共だ！
壮麗な邸宅と豪華な別荘を所有し、汚染された都市から回避し、
奢侈贅沢品で常に満腹生活している大ブルジョアジーだ！
そのことを忘れるな！！[6]

6　永山則夫『人民をわすれたカナリアたち』（辺境社、一九七一年）二二頁

立命館民主主義研究会

立命館大学で無批判に讃えられる「立命館民主主義」という学内意思決定制度に疑問を持った学生たちによって 2021 年に創設された研究会。立命館大学におけるあらゆる不穏分子の獲得を続け、大学内における秩序の攪乱を狙って活動をしている。メンバーは数十人とも数百人とも言われているが、定かではない。反当局・反セクトの地下ネットワーク。

私のアナキズム

ラファエル・バレット（訳：青丹桃花水）

解題

『私のアナキズム Mi anarquismo』は、パラグアイの作家、ラファエル・バレット（Rafael Barrett：一八七六－一九一〇）が、一九〇九年に発表した文書である。バレットは、二十世紀初頭のパラグアイ文学を代表する作家の一人だ。その政治思想に注目すると、バレットは当初、ニーチェ的な個人主義の立場をとっていたが、一九〇六年末から、社会的アナキズムへ転向した。そして、一九〇八年以降、アナキストと自称するようになった。[1]『私のアナキズム』は、このバレットの変容を象徴する文書であり、彼の思想を明らかにしている。

原文はウィキソースを参照した。[2] バレットのすべての作品は、パブリックドメインになっている。

私のアナキズム

「政府がない」という語源だけで十分だ。権威の精神と法の威信は破壊されなければならない。それがすべてだ。

---

1 Sánchez-Cabezudo, Francisco Corral. June 2000. Rafael Barrett: El hombre y su obra. November 23 2024. https://www.ensayistas.org/filosofos/paraguay/barrett/corral.htm

2 Barrett, Rafael. Mi anarquismo—Wikisource. November 23 2024. https://es.wikisource.org/wiki/Mi_anarquismo

アナキズムは自由検証の成果になるだろう。

無知な人々は、アナキズムとは無秩序であり、政府なき社会は常に混沌と化すと思っている。アナキズムが、政府という武威によって外部から押し付けられる秩序とは、異なる秩序であると気づかないのだ。

しかし、例えば科学の発達に注目すれば、権威の精神が弱まるにつれて、私たちの知識が普及し、確立されていったことがわかるだろう。ガリレオは、塔の高いところから異なる密度の物体を落として、落下速度は質量に依存しないことを示した。だから、物体は同時に地面に着いたのだが、その決定的な実験の立会人は結果を受け入れなかった。なぜなら、それはアリストテレスの言っていたことと一致しなかったからだ。アリストテレスの科学は政府だった。つまり、彼の学説は法律だったのだ。他の立法者たちもいた。アウグスティヌス、トマス・アクィナス、アンセルムスである。では、彼らの支配には何が残っているだろうか？　今やそれは妨害の記録に過ぎない。私たちはよく知っている。真実は事実にのみ立脚するのだと。どんなに著名な学者でも今日、彼らの権威を論拠として提示することはないだろう。つまり、恐怖によって彼らの概念を押し付けようとする者はいないのだ。再現実験によって実証されるために、発見は実験によって描写されるだけにとどまる。では、これは何なのだろうか？　これは自由検証、私たちの知的繁栄の基礎である。現代科学は本質的な無政府状態によって偉大になったのだ。それを、無秩序で混沌としているいると非難する馬鹿はいない。

社会的繁栄は同じ条件を必要とする。

アナキズムは、私の理解では政治的自由検証だといえる。

法の崇拝をやめなければならない。法は崇拝に値しない。それは現実の全ての進歩の障害物である。法は明確に廃止されるべき概念だ。

民衆を暴力によって統治する法や憲法は偽物だ。それは研究や人間の共通の合意の産物ではない。少数の野蛮人の産物なのだ。彼らは自分の欲望と嗜虐心を満たすために、暴力をわが物としたのである。

おそらく社会現象は、深遠な法則に従っている。私たちの社会学はまだ揺籃期にあり、それを知らない。疑う余地のないことは、私たちはそれを研究するべきであり、それが解明されれば、とても役に立つということだ。[3] しかし私たちは、たとえ深遠な法則を知っても、決して、それを法規や統治制度として定めることはない。なぜ？　もし実際にそれらが自然法則なら、好むと好まざるとにかかわらず、ひとりでに実現するだろう。天文学者たちが星々に命じるのではない。私たちの唯一の役割は証人になることだ。

明らかなのは、成文法は自然法則には似ても似つかないということだ。法典の古い羊皮紙のなんと威厳に満ちていることか！　それは、あらゆる革命において広場で燃やされ、その灰はいつまでも舞い散っている。官憲を必要とする法が、法の名を簒奪したのである。それは法ではない。嫌悪すべき偽りだ。

そして官憲！　私たちの法は、物事の性質、人間の気質に反している。それは、莫大な軍備、日に日に大きくなる暴力の巨体をみればよくわかる。そうした兵器は、政府が存在するために、人々の見えざる圧力に数分でも長く耐えるために、かき集められているのだ。

地球人口の九割は、成文法のせいで、貧窮し落ちぶれている。社会学の手を借りる必要はあまりない。最下層の民族の子どもの驚異的な同化力と創造力を考えれば、人間のエネルギーが途方もなく浪費されていることがわかる。法は母親たちの希望を踏みにじっているのだ！

私たちは中国人の靴の中の纏足、日本の植木鉢の中の盆栽のように、法の中にとどまっている。私たちは自発的に小人になっているのだ！

そして、靴を脱ぎ捨て、植木鉢を壊して大地の真ん中に植えても、目の前の広大さを恐れる！　未来はどうあるべきだろうか？　現実がそれを明らかにするだろう。私たちは、それが美しく気高くなると確信している。自由に育っ

3　このような社会学に対する期待は、本稿の十四年前に出版されたバクーニンの著作にもみることができる。それによれば、社会学は「人間社会のあらゆる発展を支配する一般法則の科学」であり、「われわれが企てようとする社会変革が実現可能となるには、これらの法則の認識と厳格な遵守が不可欠となる」［バクーニン 1973：55–56］。

た木のように。

私たちの理想は最も高潔でなければならない。私たちは現実主義ではない。私たちは、靴を他のものと置き換えるように、法を改良するのではない。その理想は、近づきがたいものであればあるほどよい。星々が船乗りを導くのだ。私たちは、直ちに、はるかな目的地を目指すだろう。そして最短の道を指し示すだろう。そうして、真っ先に打ち勝つだろう。

何をすべきだろうか？　学び、教育するのだ。すべては自由検証に要約される。わが子らに法を検証させ、それを軽侮させるのだ！

『ラ・レベリオン La Rebelión』にて発表。一九〇九年三月一五日、アスンシオン。

【文献】ミハイル・バクーニン（訳：菊池昌実）「連合主義・社会主義・反神学主義」『バクーニン著作集』（白水社、一九七三年）

違法物品ユーザーのライフハック ―JNKMN 逮捕によせて―

マジでエロい女：@real_erosugi_2

はじめに

二〇二四年十月十八日、日本全土を震撼させる事件が起きた。ヒップホップ・ラップを聴いていてなおかつ Twitter を使っていればその名を知らないはずがない、ラッパー・JNKMN（ジャンメン）。ラッパーとしてだけでなくツイッタラーとしても知られる彼であるが、**そんな彼のツイートした「ライフハック」（図1）が問題とされ、麻薬特例法違反（あおり、唆し）の疑いで逮捕されたと報じられたのだ。**

本誌をお手に取っている方の中には JNKMN という名を聞きなれない方もいると思われるため、手短に紹介したあと冒頭の話題に戻りたいと思う。JNKMN は日本・東京を中心に活動しているラッパーであり、アーティストとしてソロおよび MonyHorse・PETZ とのトリオ「MONYPETZJNKMN」で精力的な活動を続けているほか、Awich や kZm、Chaki Zulu などが所属する日本の代表的ヒップホップクルー・YENTOWN の創設メンバーとしても知られている。

長いキャリアを持つ彼はヒップホップシーンのレジェンド的存在からまだ知名度の低い若手まで幅広いラッパーとつながりを持ち、多様な面々が客演として名を連ねるアルバムの数々からはヒップホップシーンにおける JNKMN の大きな影響力が垣間見える。

そんな彼のラップは不穏さ・仄暗さを煙らせながら、時にはストレートに、時にはツイッタラーとしての一面も感じさせるユーモラスな言葉選びで構成されたパンチラインの数々を、低い声と余裕たっぷりの落ち着いた調子で並べたててゆくスタイルが特徴的。私が JNKMN の楽曲の中で特にお気に入りのリリックは、Red Bull 64Bars

（図1）

（二〇一九）で歌った「**持ってることが罪人　焚いて無くしたら犯罪回避**」というものであるが、このラインのみでもJNKMNのラップが孕む不穏さとユーモアを感じとることができるだろう。

JNKMNの関わった楽曲のうち、逮捕前直近の話題作としては五月にYENTOWN名義でリリースした「**不幸中の幸い feat. kZm, PETZ, JNKMN, Awich, MonyHorse & U-Lee (Prod. Chaki Zulu)**」が挙げられるだろう。本作のMVはYouTubeでの公開から半年少々の二〇二四年十二月時点で三百万を超える再生数を叩き出しており、彼とYENTOWNが受けている厚い支持が見て取れる。

その一方で近年のJNKMNは「引退」を示唆しており、本当であれば十月二七日にラストアルバムをリリースする予定であった。

筆者はJNKMNのファンであり、なおかつかねてよりTwitter上でFF関係にあること、さらに逮捕数日前の十月十一日には渋谷にて開催されたイベントに出演したJNKMNのライブを観ており、ちょうど逮捕が報道される前日にはその際ご挨拶叶わなかったことが残念であると知人に話していたタイミングであったため、今回の逮捕がよ

り衝撃的に感じたことをよく覚えている。

　冒頭の話題に戻ろう。本件はJNKMNのイリーガルなトピックを多く扱った楽曲の内容や、家宅捜索の際微量の乾燥大麻が発見されたことから『よくある』ラッパーの逮捕と同一視されている節があるが、**その実単なる言論弾圧、重大な『表現の自由』の侵害であるといえる。**当該ツイートを見れば分かる通り麻薬の利用を直接そそのかすような内容ではない上、JNKMNの日頃のツイート群と併せて読めば、**当該ツイートが『所持が違法である物品の所持者に向けて、わざと隠語さえ使わず大っぴらに注意喚起をするというユーモア』、すなわち『ネタツイ』であることは明白である。**このような冗談めいたツイートを論って逮捕、などという手口が罷り通ってしまえば、**もはや我々は犯罪とされる行為について口にすることさえできないだろう。**後にJNKMNは放免され現在では活動を再開しているが、ラストアルバムは実質的に延期状態、活動にケチをつける形になったことはいうまでもない。もしかしたら今回の逮捕で出演が見送りになったイベントなどもあったかもしれない。

　今回起きた一連の騒動は、**起訴できないことを承知で活発化するヒップホップシーン、ならびに昨今の大麻容認という潮流に対する締め付けという意図から、影響力の強いJNKMNを標的として見せしめ的に引き起こされたものではないだろうか。**だとすればあまりにも醜悪である。

　そこで、本稿では違法物品を常用していた・またはそういった方の近くにいた経験のある複数名にご協力いただき、**本誌のテーマ「自由と抵抗」の実践として、今回JNKMNが逮捕される原因となったツイートのような「違法物品常用者のためのライフハック」を記してゆきたいと思う。**

　なお、本稿の内容は違法物品の所持・使用を推奨するものではなく、本誌を手に取っている**違法物品など完全に無関係な読者の皆様が身の回りに潜む違法物品使用者たちの手口を見破り取り締まる際の参考にしていただくため、**そういった人間の用いているライフハックを記したものである。**なぜなら、そういったものの魔力に「抵抗」し、取り締まることで依存性からの「自由」を獲得することこそ「自由と抵抗」の実践であり、そうした活動を徹底することで**

違法物品を題材としたネタツイがネタツイとして認識されるものと考えるためである！
その旨、十分にご理解いただきたい。

☆バレない方法☆

セキュリティ

・**自分にできる限りの安全対策をする。** 複雑なパスワード、こまめな履歴削除、連絡先は記録せず暗記。持ち運びは最低限。隠し場所は誰にも教えない。念の為指紋も残さない。**これはマインドセットにも繋がる。ほぼ祈り。**（26歳・略農従業員）

・当たりまえの話ですが **LINE などの秘匿性の低いアプリで薬物に関する話をするのはやめましょう。** どちらかが捕まった時余裕で復元されます。（30歳・会社役員）

目撃を避ける

・使用中は**宅配だとしてもピンポンにでないようにしましょう。**（28歳・ＯＬ）

・**一回で買う量を少なく**する、**灰はトイレに流す。**（26歳・フリーター）

臭いに気を付ける

・**大麻を吸う時は臭いが漏れやすい**ので、ドアや窓にしっかり目張りをするとよいと聞きました。[1]（年齢・職業非公開）

・換気扇はもちろん回さず窓も開けず。（28歳・ＯＬ）

・ホテルで吸う時は**バスタオル濡らしてドアとかにかける**といいってよく言いますよね。（年齢・職業非公開）

1　大麻は甘い・酸っぱい・土臭いなどさまざまに形容される独特の強い臭気をもち、通報や逮捕の原因になりやすいとされる。

☆管理方法☆

あまり見ないところ・臭いが出ないところに隠す

・実家にも一応置いてあって子供部屋の押入れのマイクケースの中に保管してます。パイプも同じように隠してます。（31歳・会社員）

・家の中では**生理用品の中**に隠しています。（26歳・フリーター）

・体に塗るやつ（オールドスパイス）[2]は**中ほぼ空洞だからパケ[3]入れれるし、匂いも出ない**から神。（92歳・会社員）

・友達は五個入りの**あんぱんとか買ってちょっと食べて中に入れる**と良いって言ってたけど試してない。（31歳・会社員）

・実用したことはないですが、**犬のフン入れるのに使う水色の袋はまじで臭い漏れない**ので、犬飼ってる人なんかはティッシュに包んであれに入れてたら少なくとも臭いでバレることはないかと。（25歳・会社員）

・知り合いは親来る時だけ**本に挟んでいた。**（24歳・無職）

高温や光を避ける

・**ＬＳＤは高温や光に弱いので、アルミホイルに包んで冷凍庫に入れておく。**変に**厳重にすると同居人に怪しまれる**ので、包んだ状態で小さなタッパーにティッシュとかと一緒に入れて冷凍庫に。（25歳・会社員）

・ＬＳＤグミは普通に冷蔵庫に入れてる。（31歳・会社員）

・一人暮らしして冷蔵庫に隠蔽。（24歳・無職）

2　アメリカを中心に人気を博す、スティック状のデオドラント剤。強い香りが特徴。

3　パッケージの略で、違法物品を小分けにした袋を指すこともある。

☆持ち運び・移動☆

買わない・持ち運ばない

・大前提として、**家から持ち出さなければ捕まることはありません**。知ってる限りでも捕まっている人間は単純所持の現行犯ばかりです。（30歳・会社役員）

・**基本持ち運ばない**。買った時はなるべく警察の前を通らないルートで自転車で帰ってる。多分電車の方が職質リスク少ない気もしてるが、ブリってる時[4]に電車乗りたくなくて困る。**本当はタクシー使うべき**だがケチっちゃう。（31歳・会社員）

・ぶっちゃけじいやは基本、**自分では買わない**。じいや界隈の友人から貰ったり、近所の小娘と一緒に嗜むことなどがあった。（77歳・じいや）

4　大麻を使用し、効果がポジティブに現れている状態のこと。

入れ物を選定する

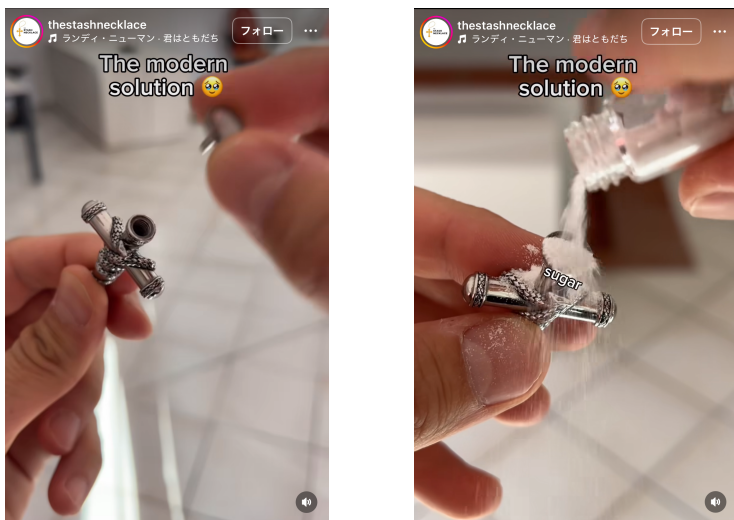
・基本的に自分は家でしかやらないので持ち運びはしませんが知人は**靴下やパンツの中（通称チンパケ）**に入れて持ち運んでいました。（26歳・フリーター）

・**車なら内装はがす。**これはベタか。（92歳・会社員）

・感動した隠しライフハックは**DSの電池パックを抜いてその中にジョイント**[5]を入れておったやつじゃな、あれは見事じゃった。（77歳・じいや）

・ポ〇キーみたいな重さが不自然にならないぐらいのお菓子の箱に入ってます。（28歳・ＯＬ）

・自分は速いの[6]やらないので実際どうかわかりませんが、そういうのを**隠して持ち運ぶ用のキーホルダーとかペンダント**（図2）が売っていて、遊ぶ時とか中に入れて持

5　喫煙のため乾燥大麻をタバコ状に紙などで巻いたもの。
6　薬物を効果で大別した際使われる表現のひとつで、一般的にコカインなどが『速い』とされる。

（図 2）インスタグラム上で宣伝されている、内部に砂糖などを入れて持ち歩くことを目的としたペンダントの一例。こうした**粉末状の違法薬物を運搬することなど想定しているはずがない製品**を悪用している可能性がある。

ち運んで、こっそり吸って遊ぶみたいですよ。（22歳・学生）

・大量に**チャリンコのサドルの中**に入れてたことある。（92歳・会社員）

・職質などの心配があまりない地元なので普通に**筆箱やメガネケース**なんかに入れておったかな、**自然に持ち運んでてもおかしくない物にしまっておったぞ**。（77歳・じいや）

職務質問をかわす

・もし持ってしまっているときは、**警察官を見かけても石だと思って無視しましょう**。彼らは**気にする素振りや雰囲気に過敏に反応し職質を仕掛けてきます**。**職質拒否は最終的に令状出るまで粘られる**のでオススメしません。（30歳・会社役員）

・職質は**ケツかきながら答える**とケツばっかチェックされ

て他見られないことがある。（92歳・会社員）

・**急いでる感**の演出、若干渋ってから身分証を見せれば警察側の面子も立つので身体や所持品の検査をされずに済む場合も多い。**いざとなったらトイレに行けばよい**、と思えば堂々としていられる。**最悪その場で排泄すれば何が出ようと違法収集証拠になるので裁判で有罪にならない**、などの知識があればこれもマインドセットになり、堂々と対応できる。（26歳・略農従業員）

☆もしもの時の対応☆

もしも逮捕されたら

・**【逮捕後】弁護士が来るまで何も喋らない。**当番弁護士はいつでもすぐ来てくれるが、初回のみ無料で2回目からは正式な依頼となり金がかかる。貯金が50万円以下なら無料で国選弁護人を呼べるが、来てくれるまで数日かかる。**とにかく、弁護士が来るまで何も喋らない。弁護士が来たら指示に従う。**（26歳・略農従業員）

・【逮捕後②】逮捕の翌日あたりで検察に送られ、勾留質問が行われる。この際「**日本国内に在住する知人1人だけに、自身が逮捕勾留されていることを連絡できる**」というシステムがある。しかしスマホは押収されているため、**その知人の本名フルネームと電話番号を暗記していなければならない。**いざというときに連絡すべき人と、その人に**やってもらいたいこと（証拠隠滅など）があれば事前に取り決めておく**とよい。（26歳・略農従業員）

・逮捕されたこともされるつもりもないですが、もしもの時のために**救援ノート**[7]は買って読んで、**逮捕後の対応とか勉強**しました。（22歳・学生）

知人が逮捕されたら

・友人が成人になる年の19の時警察に捕まって、**成人にな**

7 救援連絡センターが発行している『救援ノート・逮捕される前に読んどく本』のこと。逮捕された場合の対応や心構えなど、もしもの時に立場を問わず役立つ情報が書かれている。模索舎などで購入できる。

るのを待ってから聴取に来た。はぐらかさずに、どこで誰からいくら位で買ったとか全部正直に証言して**協力姿勢を見せたことで書類送検のみで済んだ！**（21歳・学生）

☆日常生活☆

ライフスタイル・マインドセット

・トリップに雑念を持ち込まないため、**なるべく清く生きる。**具体的には、人に迷惑をかけない、かけたらちゃんと謝る。なるべく人を助ける、助けられたら感謝する。自分が自分自身に納得できるように生きることを心がける。（26歳・略農従業員）

・ＬＳＤみたいな、使うと長い時間楽しくなることは月に1回とかなにかしらの限度を設けるべきです。（25歳・会社員）

非使用者との付き合い方

・周囲をヤクブーツに誘うのはやめましょう（28歳・ＯＬ）

・普通の人の来客が来る時、ボング[8]はシンプルにしまうか、ふざける時は花を差して花瓶っぽくディスプレイしていました。（31歳・会社員）

・当たり前のことですが、**ドラッグとの距離が近い人間とそうでない人間では考えや感覚がまったく違う**ので、付き合い方をかなり慎重にする必要があります。以前学内でかなり仲の良かった友人に合法ドラッグを使用した経験を告白したところ、かなりドン引きされ、結局疎遠になってしまいました。たぶん言いふらされてもいると思います。違法なこともしていると知られればどうなったことか・・・（年齢・職業非公開）

その他

8　喫煙具の一種で、たびたび乾燥大麻を使用する際にも使われる。

- **暇か追い詰められてるから（薬物に）逃げる**、彼氏いたら話し相手いるから暇にもならんし追い詰められることもないからやらなくなる（22歳・アイドル）
- 結局合法のをたまにやるか、合法の国に旅行したときにやるぐらいが一番いい付き合い方だと思う。少なくとも一般人なら。（22歳・学生）
- 皆で使用中ヤバくなっても救急車呼んでもらえない場合もあるので**体調は万全で挑みましょう。**（28歳・ＯＬ）
- **局留めにして、実家に届かないようにしていたな。**ちょうど二〇二一年のクリスマスに届いてクリスマスチキンをあり得ないくらいの勢いでかぶりついててお嬢に注意されて我に帰った時もあったわい。（77歳・じいや）
- **知識があるとそれだけで安心できて、トリップの質も向上する気がします。**（26歳・酪農従業員）

おわりに

いかがでしたか？

本稿を執筆するにあたっては JNKMN 氏よりツイート使用の許可と、さまざまな方から貴重な情報提供をいただきました。すべての方にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

マジでエロい女
90年代後半、某国の軍事研究施設にて行われていたエロさを軍事利用するための研究の過程で誕生。のちに脱走、現在は Twitter で淫語や暴言を連投するなど活動は多岐にわたる。

マジでエロい女 lit.link(リットリンク)

https://lit.link/realerosugi

煤煙分析表

檜田相一

いかに学生運動をするか。世界中の大学で学生運動が展開されているが、日本においてそれが特殊なのは、往々にしてゼロからそれを構築していかなければならない点にある。さらに、仲間を集めるための手段の多くは封じられている。こうした状況において我々はどのように仲間を集めてコミュニティを建設していくことができるのかを提示するマニュアルとしてこの文章を執筆する。

学生運動の要素は次の四つの段階に集約することができると考えることができる。本分析表ではそれぞれの段階について順番に解説していく。

一　仲間を集める
二　持続的なコミュニティに発展させる
三　考えを統一させていく
四　人々の前に登場する

第一部：仲間を集めるために

この文章を必要とする人にとって、仲間を集めなくてよい学生運動は存在しないと考える。自分ひとりで社会を変える権力を持っていたり、あるいは議会政治が解決してくれると思われる問題についてであれば、わざわざ運動をする必要はない。一切の権力をもたない労働者階級にとっては集まること、数だけが唯一もてる実力であるというのが大原則である。

大学のキャンパスで仲間を集めることは非常に難しい。すでに社会に関心のある学生が集まる場が失われたキャンパスというのが私たちが直面する現状だ。だからこそ、わざわざこういうものを書かなければならない。

まず、ビラが許可されている大学なら地道にビラを貼り続けるべきだ。読書会や上映会を準備して、そこへの参加を呼びかける、あるいは大学で具体的な問題が生じているなら、その問題について呼びかけることになる。そこで出会った人の中から仲間を作っていくのが学生運動の基本になる。小さいもので構わないから企画を打ち続け、ＳＮＳとビラで宣伝を続けていくべきだ。また、社会問題に関心のありそうな学生が参加しているサークルであれば、そこに参加して仲間を作っていくのもいいだろう。

しかし、問題となるのは、そもそもビラを貼れない、学生が教室を借りることのできないキャンパスが普通になりつつあるという問題をどう解決するのかということである。管理されきってしまい、志を同じくする人を集めることのできないキャンパス。それに抵抗していく動きとして発生した／利用されたのがタテカン同好会とだめライフ愛好会だと私は考えている。

タテカン同好会は、キャンパスの規制そのものを問題化し、看板を設置して排除される流れをＳＮＳに投稿することで拡散されてきた。また、立て看板は一人では作れないから、みんなで集まって制作して設置するというプロセスが必要となり、これが運動をする仲間の結束と関係値をつくることに役立ってきた。

だめライフ愛好会は、大学から警戒されにくい形でうごめく中で仲間を探そうとしていた。まず仲間が集まらない、学生運動を始めるためには大きな心理的ハードルがあるなかで、だめライフ愛好会という活動はそのハードルをぐっと下げるものだったから、学生運動を志す人の中でも利用されたのだろう。

結局、身も蓋もないことを言えば、学生運動をどのように展開できるかは、その取り組む人の個性や能力に依存してしまう。しかし、ビラと学習会が基本だということはまず言っておきたい。そのうえで、ビラすらも配布できないキャンパスではだめライフ愛好会のようなもので潜り込んでいくか、あるいは真面目な学習サークルや企画を立ち上げて、そこに集まる人と一緒に活動していくのもよいのかもしれない。あるいは、もっと直接的な活動をしたければ、タテカン運動のようなことをやるのがいいだろう。とにかく、仲間を集めなければなにも始まらないし、そのためには常にキャンパスで「活動しようとしている学生がいる」とアピールできるようにすべきである。そうでなければ、せっかくの機会を逃してしまうことになるだろう。

第二部　持続的なコミュニティに発展させる

関心を持ってくれた人を持続的なコミュニティに集めていく必要がある。この過程を重視しない人も多いが、私は

キャンパスで学生が継続的に行動できる基盤をつくることがなにより重要だと考えるのでここについても書きたい。コロナ禍以降、誰一人仲間がいない状態からなんとか活動を作っていこうとする多くの学生を見てきたが、それは本当に大変な活動であり、私たちはなにかしら「土壌」を作ってそれを後輩たちに引き継いでいくことを目的にしなければならない。

「コミュニティ」という言葉を使うのは、それが単に運動体や学習サークルを超えて外縁部を持つものであるべきという考えに基づく。それはつまり、一緒に活動してくれる仲間だけでなく、活動というハードルを超えることはできないけれど応援してくれる人、面白がってくれる人も同時に作っていく必要がある。現在の京都大学の学生運動、あるいはかつての大学の自治寮やサークル運動は、こうした運動の周辺に分厚い好意的な層がいたからこそ、いざという時には多くの学生が集まり大学当局と対峙することができたのだ。

学習会や運動のための会議の場だけでなく、もっと文化芸術系・思想系、あるいは単に野次馬的に集まってくれるような人たちが集まれるような場が必要である。それは、たとえばそういう人たちが参加しやすい「鍋」のような形式であったり、あるいはタテカン制作などの興味関心に関わらず誰でも参加できるような形式の運動でもよい。とにかく、運動の内部だけでなく、運動に主体的に参加してくれることはなくても、好意的に時々手伝ってくれるような人たちとの関係を構築しておくべきである。そういう学生が、意外と「〇〇さんという人がたぶん興味もってくれるよ、関心ありそうだったよ」という話をもってきてくれるのである。

サークル棟や自治寮が運動のなかに組み込まれていた時代は、自然と運動の周囲に広いコミュニティが形成されていた。運動基盤をつくるためには、そうした過去のキャンパスというのはやはり良いものとして参照されるべきであ

る。いちから運動を作っていくと、どうしても「活動家集団」のようなものになりがちである。そうなってしまうのは仕方がないが、それだけでなく学生運動の周囲に広いコミュニティを作ることが運動に持続的に人を参加させ続ける土壌を用意すると考える。実際、私が東北大で集会などをやるとき、左翼学生と呼ぶような人は過半数も来ていない。東北大よりほかの大学の方が主体的に活動している人が多いところはたくさんあるが、しかし東北大には学生運動を主体的にやっている学生の周囲に、五つ以上のサークル、自治寮、フリースペースなどがあり、関係値のある学生は百人を超えるので集会などを開催することが可能となっている。

第三部　考えを統一させていく

これは、必ずしも思想的一致を作ることを目指せといいたいわけではない。しかし、すぐに方向性が一致できるはずもないし、表面的な雰囲気では同じような方向を向いていた人が、運動をやっていくうえで思想的な違いが生じてきてしまうことは多い。しかも、現在の学生規模では異なる思想の人どうしであっても一緒に組んでやっていくほかないのである。

しかし、それでも考えを統一させていくように努めるべきである。それは、ともに自分たちの置かれた状況を分析し、あるべき方針を立てていくために必要な過程である。要するに私が言いたいのは、議論して一致した方針を作ることが重要だということである。運動というものは、目標が同じだったとしても常にアプローチは複数のものがあり得る。穏健に共感してくれる人を集めていく方針が望ましいと判断されることもあれば、「悪名は無名に勝る」としてとにかく目立つ方法を採用することもあるだろう。いずれにせよ、議論なしに方針が曖昧なままで運動をすること

は避けるべきである。

議論の文化は運動を強固なものにすること、そして運動内でのトラブルや対立を回避することに役立つ。近年、ネットワーク型の運動、ＳＮＳで自然発生的に結成される運動が持て囃されやすい。しかし、そのような運動について私はいくつかの懸念がある。それは特に、議論をしていないせいで糾弾合戦になりやすいこと、運動の目的や戦略が曖昧なまま進行していってしまう点である。運動の基本はやはり膝を突き合わせた会議である。学生運動をするような人はどうしても我が強かったり、実存と運動が結びついていたり、あるいは過去に傷つく経験をした人が多くなるので、普通の団体などと比べても対立などは起きやすいし、運動内のハラスメントや不平等はあってはならないこととして厳しい目が向けられる。したがって、運動体が崩れることなく維持されていくためには内部で議論の文化がなければならない。本質的な対立を引き起こす前に、意見をぶつけ合うことが必要である。

そして、議論は運動の目的や意義を明確にするし、内部で運動の意義と戦略がはっきり共有されていることで運動体はより強いものになる。自分たちの運動が効果的なのかどうかが分からない運動体は、ふとしたときに人が離れていってしまいやすいものである。

「考えの統一」としてはやはり学習会をやっていくことの重要性についても書いておきたい。ＳＮＳから運動に参加する人も多いなかで、運動として取り組むテーマについて深掘りをして知識を表面的なものでないようにしていくことは運動を強固なものとするために必要不可欠である。知識が曖昧なまま参加した人は、簡単に運動から離れていってしまうことも多い。運動の対象とする問題は多くの人々が主体的に行動しなければ解決しないということを理解するために学習会は必要なのである。

では、学習会はどのようにやっていくべきか。学習会・読書会にはいくつかのやり方がある。まずは以下の三つの

類型を参考にやり方を検討していくべきである。

①発表スタイル

おそらくこれが一番多いだろう。発表者がよく準備して発表し、参加者と質疑応答をする。しっかり準備がなされていればこれが最もやりやすい。しかし、これは発表する人がかなりの準備の負担を強いられるという問題がある。自分で発表をできるような学生が複数人いなければ継続的におこなうのは難しい。しかし、たとえば新歓期などの重要な時期にはこのようなゼミ形式の企画をやるのがよいだろう。

②事前に読む＋要約レジュメ

読書会と呼ばれるものはこの形態をとることが多い。全員が事前に読んできたうえで、簡単な要約レジュメで内容を確認し、議論をおこなっていく。しかし、事前に読んでもらうというのは結構難しい。それに、本を買ってもらうことが必要であったりする。なるべく事前に読んでもらえるようにするためにも、本はスキャンしてデータで配布できるように務めるべきである。また、本のなかで解釈が難しい場所の話ばかりして、自分たちの議論ができないようなこともよくあるので、細かい議論ばかりにならないように注意が必要である。

③その場で読んでいく

これは準備のコストが低いが、人数が増えると難しくなっていく。少人数でお互いのペースを確認しながらやっていくには、この方法も悪くない。この方式の読書会を成功させられるかどうかは、参加者の相性次第である。したがって、長い本を読み通すことを最初から目標に据えたりしてしまうのはあまり良くないだろう。

注意すべきは、運動の文脈における読書会は、文系の大学生が研究を目的としてやるようなものとはかなり異なるということである。それは、運動に必要な知識をつけるだけでなく、議論を盛り上げて一体感を形成し、人々を運動のなかにオルグしていくものでなくてはならない。そしてこれは非常に難しい。賢い人間であればそういうことを自然にこなせるのであろうが、たいてい議論が盛り上がらないことが多い。したがって、レジュメ作成を担当しない人は、なるべく議論をもりあげられそうな話題や質問を考えておくようにすべきである。そして、一緒に集まるということ、あるいはみんなで仕事を分担していくということそのものを運動の重要な過程として認識していくべきである。

第四部　人々の前に登場する

人が集まればようやくキャンパスで政治的存在として登場することができる。もちろん、強い人がいるならどんどん人前に出ていくべきだが、大半の人にとって、人前に出ていくことは非常に勇気を必要とすることだと思う。なので、まずは人が集まるまで無理に人前に出ずに、学習会などをやるだけでいいということは伝えておきたい。もちろん、緊急の問題が迫っていて、それに対して立ち上がるような運動の際には無理にでも表に出て行かなければならないこともあるだろう。しかし、この文章はあくまで「なにもない場所から運動を起こす」人に対して書いている。そういう人に対してはなかなか運動経験者も有効なアドバイスをしてあげることができないことが多いからだ。

さて、人々の前に登場することができれば、運動に対する注目などは飛躍的に上昇していくだろう。ビラ配布、集会、署名集めなど、有効な方法は運動によって異なると思われる。しかし、いずれにせよ、学生が集まり異議申し立ての運動を起こしていくためには、このキャンパスへの登場をいかに活用していくかという視点で考える必要がある。

キャンパスにおける大衆運動の基本になるのは「エスカレーション」という概念である。これは、おもに欧米の学生運動で使われる概念であるが、パレスチナ連帯運動などを通じて日本の学生運動のなかでも使われるようになってきた概念である。これは、ひとつずつ小さい要求から運動を始めていって、徐々に運動を大きな要求へと引き上げていくようなやり方である。

たとえば、大学における学費の問題を扱いたいとする。学費問題について知ってもらうための資料やビラを配布し、興味を持ってくれた人を集めて署名活動をおこない、要望書を大学当局に提出する。そして、大抵の場合の当局はそこで黙殺をしてくる。そうなると、そこに対しての抗議キャンペーンをおこない、当局の理事などとの直接対話の場を要求したりすることになる。教員からの賛同署名を集めたり、メディアに報じてもらって大学に圧力を加え、何かしらの譲歩を引き出す。

大学当局に対して、ひとつずつ要求の段階を上げていき、当局が拒否をした所を争点に据えて、それよりさらに一つ高い要求を掲げて、当局からの譲歩を引き出していくのがエスカレーションの基本戦術になる。

この「エスカレーション」という概念を非常にうまく利用していた運動として、京都大学における二〇二三年の「熊野寮祭総長室突入」を挙げたい。エスカレーションの本質は、相手の拒否を大衆的な怒りに変換することである。そして、この熊野寮が主催した企画はそれを非常にうまくやったと思っている。私もこのときは野次馬的に参加していたが、学生の強い怒りの拡大を感じる運動だった。

熊野寮は大学当局から交渉の窓口を閉ざされつつあり、大学の厚生課は熊野寮が交渉を要求してもまともに取り合わない。京大の時計台前でそうした過去の経緯を話し「厚生課が話を聞いてくれないのであれば、総長に直訴するしかない！」と呼びかける。集会では、大学当局による学生への不当な扱いが列挙され「じゃあ総長に話を聞いてみよう」ということで、学生たちが総長室に向かう。しかし、総長室は閉ざされていて、対話はできない。そこで野次馬

的についてきた学生たちも「これはおかしい」となって、総長室前での抗議活動にどんどん参加し始める。

「学生の話を窓口でも聞かないのだから、総長に直訴しよう」という段階がしっかり踏まれたうえで、しかし当局が話を聞かなかったときにこそ大衆的な怒りというのは発生する。要求するために段階をひとつずつ踏んだこと、しかし学生が「話し相手とすら認識されていない」と気づいたとき、自分たちが主体として認識されていない時に、怒りというものは広がっていく。これは、盛り上がった多くの学生運動に共通する現象と言えるだろう。学生運動を主導する人は、こうした大学の話し合い拒否を常に好機として捉え、その不当性を必ず喧伝し、またさらに高い要求を持ち出して大学当局から譲歩を引き出すような運動を計画しなければならない。そのような取り組みがうまく成功したとき、学生運動は大衆的なうねりとして拡大するはずである（私は成功したことがないけれども）。

補論：連絡の取り方

あるサークルが新歓に大成功した事例がある。このサークルのやり方を模倣しようとしたらキャパオーバーになってしまうのが普通だと思うが、いろいろな運動の参考になると思うのでとにかくひとつの「正解」として共有しておく。

運動の拡大において、勧誘の成功の指標を「グループラインにいかに人を増やしていくか」という観点で考えてしまっている人は多い。しかし、単にグループに人を入れるだけでは運動に参加してくれる人を増やすことはできない。たとえば、あなたがスルーしたままにしているグループからの連絡がいくつあるか、ほとんど内容を追っていないグループの様子を想像してみてほしい。グループに人を招待しただけで終わりだと思ってはいけず、そこからどう主体的に活動に参加してもらえるかこそが私たちが考えなければならないことである。ゆえに、個人連絡が活動の基本と

なる。

私が紹介したい某サークルは、新歓で興味を持ってくれた学生すべてと個人でLINEを交換し、新歓の予定表も共有せず、ひたすら「〇日はこれをやるので来ませんか？」とメッセージを送った。個人からのメッセージだから返信しないといけない気持ちになるし、リアクションの数の少なさやグループから脱退する人の多さによって気持ちが離れてしまうことを予防できる。

もちろん、そもそもメッセージを新入生が返さなければと思わせるだけの人間的魅力、コミュニケーション力、そしてマネジメント力があってこそ可能になる勧誘作戦だと思うが、このようなやり方はさまざまな運動の現場で活用できる。

たとえば、集会や講演会などで、早いうちに日程を告知し、一～二週間前から個別でしっかり調整を呼びかければ参加者数は二倍にはなる。グループに日程調整を投げたとき、来てほしい人には必ず個別で回答するように連絡する、といったことが運動に関わってくれる人の数を増やすのである。オンラインでのやりとりがメインとなる二十年代の学生運動において最も重要なテクニックだと思っているのでこのように追記することとした。

檜田相一
東北大学で学生運動をやっています。最近は全国学生行動連絡会という全国組織を結成し、日本の学生運動の統一戦線と横断的なネットワークを確立すること、そして日本において学生を政治的主体として取り戻していくことを任務として頑張っています。アナキストと相性はそんなによくありませんが、仲良くしていきたいと思っています。

アナキストのための『労働廃絶論』再入門

久保一真 a.k.a. ホモ・ネーモ

はじめに

ボブ・ブラックなる怪しげなアナキストが書いた『労働廃絶論』なる怪しげなテキストを、詩的なアナキズムの聖典（たとえばハキム・ベイの『T.A.Z.』のように）として神棚に祀りあげずにいることはむずかしい。タイトルといい、著者名といい、なにやら禍々しいオーラを纏っているからだ。これを読んだアナキストの多くが「ふむふむ、深淵な哲学だ。もちろん俺は理解しているのだが、ディズニーランドやインスタグラムで喜んでいる知能の低い資本主義の奴隷どもには理解できまい・・・」と、訳知り顔で佇みたくなる衝動に駆られるのも理解できる。禍々しければ禍々しいほど、そのテキストを深淵なものであると感じてしまうことこそ、アナキストがアナキストたる所以なのだから。

だが、ここに書かれている意図をどれほどのアナキストが理解したのかはわからない。私はほとんど理解されていないのではないかと勘繰っている。「労働の廃絶」というテーゼはアナキスト流の冗談じみた大言壮語でもなければ、深淵な比喩表現でもない。しかし、多くのアナキストはそのどちらかだと思い込んでいるのではないか。「いや、労働の廃絶って無理だよね？　でも、みんな真面目な顔で『労働廃絶論』をほめてるし、これってツッコんだらダメなの？なんで誰もツッコまないの？　もしかしてツッコんだらバカだと思われるの？」という戸惑いを悟られまいと、訳知り顔でごまかしているように私には思えてならないのだ。

しかし、ブラックはおそらく「労働の廃絶」が可能であると本気で信じていた。そして私も本気で信じている。読者はきっと疑問に思うだろう。なにゆえ信じることができるのか？　そんなことは不可能ではないのか？　それを説

明するために私は（怪しげな）アンチワーク哲学者として、あるいは（怪しげな）「まとも書房」なる一つの出版社として、『労働廃絶論』の新訳と解説を世に送り出した。本稿を『黒煙』に捧げるのもまったく同じ理由である。『労働廃絶論』の再入門へと読者諸氏を誘うことで、『労働廃絶論』を腫れ物に触るような扱いから、場末の立ち飲み屋であっけらかんと語られる対象へと引きずりおろしたいのだ。

とはいえ、私は「俺こそがボブ・ブラックの真の理解者であり、お前たちはフェイクである！」と騒ぎ立て、読者諸氏を内ゲバにお招きしたいわけではないことは、是非ともご理解いただきたい。私はアナキストとしてほんの少しの敬意を読者諸氏に捧げたいし、できれば私に対しても同様の敬意を差し向けて欲しいと考えている。それはアナキズムが口酸っぱくその重要性を指摘する対話への敬意であり、相手が（あるいは万人が）基本的な論理的思考も持たないキチガイではないと信頼するだけの勇気でもある。

なるほど、ときに資本家や権力者を擁護する論敵が悪魔であるかのように騒ぎ立てなければ、搾取構造から抜け出すことができないシチュエーションは珍しくない。だからこそアナキズムは必要とされているわけだ。とはいえ資本家や権力者、あるいはその擁護者も、親切心や論理的思考を持ち合わせた一人の人間であることは忘れてはならないはずだ（資本家や権力者として振る舞うときは、そうではなくなることも珍しくないのだが）。対話の拒否とは戦うべきだが、対話は戦いではないことには、アナキストであるなら同意するだろう（あなたがアナキストかどうかは知らないが、『黒煙』なる禍々しい雑誌を手に取っている時点で、十中八九そうであろうと私は勝手に想像している）。

さて、前置きはこれくらいにして、そろそろ本題に入るためにテーブルにつこうと思う。ここから披露するのは、『労働廃絶論』をわざわざ翻訳し直し、私財を投じて出版した一人の男が、万人へ（とくにアナキストへ）訴えかけんとする『労働廃絶論』の批評である。それほどの情熱を『労働廃絶論』へ向けた人物を、私はほかに知らない。そのことを理解してくれたあなたならきっと同じテーブルに座ってくれるだろうと、私は信じている。

労働廃絶論と労働短縮論の違い

少なくない労働者は労働に辟易し、労働を控えた学生たちは労働の運命に恐れ慄いている。その結果、現代において労働を否定するムーブメントは雨後の筍のように現れている。寝そべり族やアンチワーク、静かな退職、だめライフなどはその典型であろう。顰蹙を買うことを恐れずに、こうした通俗的労働批判を雑に要約するならば次のようになる。「俺（あるいは俺の仲間たち）は資本主義的なキラキラしたショッピングモールやロレックスにホイホイと釣られるほど馬鹿じゃない。資本家に搾取されるための奴隷でもない。人間はブッシュマンやプナンの人々のように最小限の時間だけ労働し、残りの時間は仲間と鍋を突いたり、大麻を吸ったりすればいいのだ。それが真の幸福なのだ」。左翼が好む難解な言い回しで包み込まれているものの、寝そべり族宣言はこうした意図を伝えるメッセージであることは、以下の一文を見ればあきらかであろう。

> 我々は住民に最小限の労働の他に自分自身の趣味を追求できるよう追い求める。[1]

なるほど、寝そべり族やだめライフは統一的な見解を持つ一枚岩の集団ではない。だが、私が見る限りは上記のようなスタンスはおおむね一致しているように思う。これを便宜的に労働短縮論と呼びたい。

実を言うとこのスタンスは、『労働廃絶論』とは根本的に異なっている。労働を嫌悪しているという一点のみは一致している。ただしそれ以外のほとんどが異なっているのだ。『労働廃絶論』が難解であると感じられるのは（あるいは私の目から見て、すでに存在する日本語訳に誤訳が散見されるのは）、ここにすべての原因があると言っていい。ではなにがどうちがうのか？『労働廃絶論』の主張は、第一文にすべて詰め込まれていると言っていい。そして、そこに決定的な相違点がある。

> 誰一人として労働すべきではない。[2]

「俺」や「俺たち」ではない。「誰一人として」なのである。八時間労働は長すぎるから三時間にしようとか、「労働したい人だけすればいい」といった主張ですらない。地

1 『寝そべり族宣言　日本語版　躺平主義者宣言』（素人の乱5号店、二〇二二年）二五頁

2 ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）二頁

球上の誰一人として、一秒たりとも労働すべきではないとボブ・ブラックは主張しているのである。これはイーロン・マスクやサム・アルトマンが喧伝する「労働をＡＩで代替しよう」といった安易なテクノロジー楽観論ではないことは、大急ぎで指摘しなければならないだろう。ブラックは、次のように述べている。

私は機械オタクではない。ボタンを押せばすべてが解決する天国に住みたくはない。ロボットの奴隷にすべてを世話させたくもないし、自らの手で成し遂げたいこともたくさんある。思うに、省力化技術にも活躍の場はある。しかし、それはささやかな場にすぎない。[3]

実際、ＡＩやロボットがあらゆる労働を代替するユートピアが訪れる見込みは薄いだろう。そのことを理解するには時給千円のコンビニバイトや居酒屋店員がどれほど複雑で多様な業務をこなしているかを想像するだけで済む。テクノロジー神秘主義者たちは、驚くべきことに皿をつかんでカゴに入れることができるロボットを開発しただけでユートピアの幕開けであるかのように得意がるが、面接で「皿をカゴに入れることができます！」とアピールするバイトが使い物にならないことはあきらかであろう。ブラックはテクノロジーで労働を廃絶しようとしているわけではないし、二〇二五年を迎えたいまでもテクノロジー楽観論に現実味はない。では、ブラックはどうやって労働を廃絶しようと言うのか？　多くの読者はここで混乱に陥ってしまうだろうが、その混乱の原因とは「労働がなんであるか？」あるいは「労働のなにが人々を苦しめるのか？」についての見解の相違に由来するものであると考えられる。それを理解すれば、ブラックがなにを廃絶しようとしているのかが理解できる。ブラックは労働を次のように定義する。

私が言う労働の最小限の定義は強制された苦役、つまり義務的生産である。[4]

ブラックは「強制」こそが労働が労働たるゆえんであり、かつ労働が私たちを苦しめる根本原因であると喝破した。

3　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）三三頁

4　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）六頁

この点こそが、ボブ・ブラックが引き起こしたコペルニクス的転回であり、私たちを支配する労働観に変更を迫らねばならないポイントである。とはいえ、これだけでは説明として不親切極まりない。もう少し掘りさげるため、まずは私たちの社会に存在する通俗的労働観と、ブラックの労働観を比較して考えてみたい。

　私たちの社会には、労働とは他者にたいする貢献であり、かつ他者にたいする貢献であるがゆえに苦しいものであるという漠然とした感覚が漂っている。たとえば、本棚から労働批判を繰り広げる本を無造作に一冊取り出してみても、このことはあきらかである。

> 僕たちが考えるべきテーマとは、ズバリ、「働かない社会を作るにはどうすればよいか」である。ようするに、「ダルいし面倒くさいから、もう働くの（社会に貢献するの）やめちゃわね？」って話である。[5]

寝そべり族をはじめとした労働短縮論も、基本的にこの前提に則っていると考えられる。この前提に立って労働を批判するとどうなるか？　当然、労働を廃絶することなど不可能である。なぜなら、誰一人として他者に貢献しない社会など存続できないことはあきらかだからだ。となると、労働短縮論は必然的に消費主義批判を展開せざるを得ない。

> あなたが手のひらサイズの通信機器を作る仕事をしていたとしよう。それは確かにあれば便利だが、でも、本当にそれは生きるために絶対必要なものなのだろうか？　他者と競争して身体を壊してまでもスケジュールを守って作り上げる必要のあるものなのだろうか？[6]

つまり、「iPhoneのような過剰な娯楽をつくる必要なんてないんじゃないか？」という批判である。そんなものがなくとも私たちは衣食住を満たすことができるのだから、iPhoneを諦めて、もっと少ない時間だけ働き、のんびり暮らそうよ・・・というわけだ。言いたいことはわかる。毎年毎年カメラが増えたとか増えないとか騒ぎ立てながら

5　飲茶『14歳からの哲学入門　「今」を生きるためのテキスト』（河出文庫、二〇一九年）三二七頁

6　飲茶『14歳からの哲学入門　「今」を生きるためのテキスト』（河出文庫、二〇一九年）三三十頁

新バージョンのiPhoneを煌びやかに宣伝しているのを見て、眉をしかめたことのない人の方が珍しいだろう。とはいえ、これは最終的に神学論争に行きつかざるを得ないことは指摘しなければならない。最新のiPhoneが必要ないとしても、型落ちのガラケーならいいのか？　ポケベルやたまごっちはどうか？　それとも、おはじきとベーゴマで私たちは時間をつぶし、手紙を書いてコミュニケーションを取ればいいのか？

インテリたちは万人が納得する基準を設けようと躍起になってきた。資本主義に批判的なテキストを読むときに、「記号的消費」だとか「消費と浪費のちがい」「欲望と欲求のちがい」といったことに関して、饒舌に語る左翼を視界に入れずにいれることはむずかしい（たとえばボードリヤールやイヴァン・イリイチ、國分功一郎などである）。とはいえ、これは赤いドレスはぜいたく品であるとして焼き払おうとするポルポトの営みを、インテリ風に再演しているにすぎない。要するに「俺が気に入るものならいいよ？　俺が気に入らないものは禁止ね」というわけだ（あるいは「コカ・コーラは記号的消費だから禁止ね」という主張が普遍的な真理であり、万人が同意するとでも本気で信じているのだろうか？）。その理屈を左翼が貫徹しようとするならば、彼らはあらゆる品目の可否を決定する中央委員会を組織しなければならないだろう。「ビッグマック？　だめに決まっている！　イオンで買った惣菜？　イオンは巨大資本だからだめだろう！　近所のおばあちゃんがやってる惣菜屋？　ならセーフかな。なに？　ブラジル産の鶏肉をつかっている？　けしからん！」といった具合である。突き詰めていくと「パセリはいらないんじゃないか？　トマトなんて食わなくても死なないんじゃないか？」といった疑念に必然的にたどり着く。終着地点は万人がカロリーメイトと水だけで生活するディストピアであろう。こうした議論が的外れだと指摘するのは、アナキストであり人類学者でもあるデヴィッド・グレーバーである。グレーバーは、私たちが労働に苦しんでいる理由を消費に求める消費主義批判をバッサリと切り捨てる。

労働時間をもっと少なくかおもちゃと娯楽をもっとおおくかの選択肢を与えられたならば、わたしたちは総じて後者を選び取ってきたというのだ。この筋書きは道徳劇としてはもっとももらしいが、少し考えただけで真相でないことがわかる。なるほ

ど、一九二〇年代から、無数のあたしい仕事と産業が仕上げんなく生みだされつづけるのをわたしたちは目の当たりにしてきた。しかし、それらの仕事のうち、寿司やiPhone、おしゃれなスニーカーの生産や流通にかかわっているものは、ごくわずかなのだ。[7]

つまり、私たちが馬車馬のように働いている労働時間のうち、過剰に思えるいかがわしい娯楽（とやら）に向けられる時間はごくわずかであるという指摘である。そしてグレーバーは、そうしたいかがわしい娯楽の生産にすら役立たない労働をブルシット・ジョブと呼び、ブルシット・ジョブこそが私たちの人生を台無しにする労働であると批判する。グレーバーのスタンスは、ビッグマックやiPhoneであろうが、現にそれを人々が欲するのであれば決して無駄ではないといったものであり、そうした点で「お前が消費するおもちゃはくだらない」と切り捨てようとする消費主義批判とは一線を画していると言えよう。

さて、グレーバーによるラディカルな議論をキャッチした論客は次のような結論に飛びつきたくなる。「ブルシット・ジョブを撲滅し、私たちは少ない時間を衣食住を満たす労働や、人生にエンタメをもたらすようなiPhoneやビッグマックの生産や流通に携わればいい。そうすれば一日四時間労働くらいで済むようになるだろうから、あとはたっぷりと余暇を満喫しよう」。繰り返すが、このブルシット・ジョブ批判も『労働廃絶論』とは似て非なる主張なのである。

生産活動はそもそも遊びである

ここまで取り上げた消費主義批判やブルシット・ジョブ批判は、「誰一人として労働すべきではない」というブラックの主張までには乖離がある。なぜなら、仮に一定数ブルシット・ジョブが存在しているのだとしても、いぜんとして衣食住を提供するために（あるいはＹｏｕＴｕｂｅやプレイステーションを私たちに提供するために）、労働が最低限必要になるからである。もちろんブラックは、「山奥で座禅を組み修行を重ね、霞を食べて生きていこう」だとか「そこら中で老人や子どもが飢え死にしようが知ったことではない」などと主張しているわけではない。ここで改

7　デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ　クソどうでもいい仕事の理論』（岩波書店、二〇二〇年）三頁

めて、ブラックは強制こそが労働であると定義し、強制こそが労働を苦しいものに仕立てあげていると主張したことに注目したい。

> 私が言う労働の最小限の定義は強制された苦役、つまり義務的生産である。[8]

> もし強制されるなら、遊びも労働へと変貌してしまう。このことは定義上、明らかである。[9]

単刀直入に言い換えればこうなる。「衣食住やその他の娯楽を生み出す生産や物流、ケア、メンテナンスにかかわる行為は、自発的に、あるいは遊びとして取り組まれるのであれば労働ではないし、苦痛ではない」。あるいは、より大胆に表現するならこうなる。「生産活動は、そもそも遊びである」と。つまり、本来なら遊びであったものが、強制されることによって労働にされてしまったというわけだ。果たして本当だろうか？　ブラックは、そもそも生産活動がどのようなものであったかについて論じるにあたって、狩猟採集民の生活を参照する。

> 彼らは我々よりもずっと少ししか働かない上、彼らの働き方は、我々にとっての遊びと見分けがつかない。[10]

つまり自由に狩猟や採集に勤しむ人々は「労働している」という感覚を抱いておらず、遊んでいるだけだというのだ。実際こうした感覚は、彼らの言語のなかにも保存されている。人類学研究で知られる山内昶によれば・・・

> たとえば、オーストラリアのイール・イロント族では《労働》と《遊び》が、メキシコのタラフマレ族では《働く》と《踊る》が、同一の言葉で表現されていた。[11]

つまり現代においては労働であり、苦しいものとみなされるような生産活動が、彼らにとっては遊びと区別されていないのである（おそらく、私たちが食事を咀嚼する行為

8　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）六頁
9　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）十頁
10　山内昶『経済人類学への招待　ヒトはどう生きてきたのか』（ちくま新書、一九九四年）九十頁
11　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）二十頁

を労働とみなしていないのとほとんど同じような感覚であろう)。ここで「なるほど、狩猟や採集なら遊び感覚で取り組むことはできるかもしれないが、それは人口密度の低いジャングルだから可能だったのだろう」といった反論がくることが想定される。「八十億にもなる人口を養うためには現代の専門化され分業化された労働が必要になり、それは遊び感覚というわけにもいくまい・・・」というわけだ。その点は実際やってみないことにはわからない。とはいえ、黙々と取り組む単純作業や、ハードな肉体労働、あるいは他者へのケアすら、遊び感覚で取り組むことが可能(いや、もともと遊びである!)と主張するに足る根拠を見つけることはむずかしくない。

そのとっかかりとして、私自身の経験を参照してみたい。労働として取り組むなら苦痛になるような引っ越し作業が、友達の依頼に自発的に応じる形であれば苦痛ではなく、むしろ喜びをもたらす行為であったこと。みんなで文化祭のイカ焼き屋を運営したことは、楽しい記憶として思い出されること。友達を車で家まで送り届ける行為が、苦痛でもなんでもなく、むしろ誇らしいと感じられること。一見すると退屈な家の大掃除が興に乗りはじめ、やたらと細部にこだわりだし、むしろ作業を終えるのが惜しく感じられたこと。延々と繰り返す単純作業(たとえば私は餃子の皮づくりが趣味である)が楽しく感じられること。「遊び」という言葉を「やりたいと感じる行為」と言い換えてみれば、さらにその適用範囲は広がる。たとえば、電車でつらそうにする妊婦、駅で迷っている外国人、道で倒れている老人を見かけたとき、私は「助けたい」という感覚を抱く。そして、倒れている老人を介助したり、救急車を呼んだりする行為は「労働」だとか「めんどくさい」「やりたくない」「強制されている」だなんて微塵も感じることはない。逆に見て見ぬフリをすると苦しいと感じたり、そうしなかった理由を強引に探し出してその欲求不満を緩和しようとしたりする(「いや、俺だって疲れていたし、忙しいんだから仕方ないんだ!」とか「いや､迷惑かもしれないし!」といった具合である)。この感情の働きをみれば、私にとって人助けは「やりたいと感じる行為」と言っても差し支えあるまい。これは文系アナキストによるなんの根拠もない思い込みというわけではない。利他的行動は人間の脳にとって報酬であることは、脳神経科学の研究によっても裏付けら

れている。[12]人間はほかの霊長類とくらべて個体として弱すぎるあまり、自発的な貢献行為を含めた社会性を発展させてきた・・・という説明は進化心理学の世界でも受け入れられている。これは、人間には食を欲する食欲があるのと同じように、貢献を欲する貢献欲が備わっていると断言するに十分な根拠であろう。

さて、ここまで私が挙げた遊び、あるいは自発的に取り組みたいと感じる行為は、生産活動やケア、モノや人の輸送、人のニーズに応えて助ける行為、単純作業、肉体的なハードワークが含まれている。もちろん、私はたったいま取り組んでいるように、文章を書くクリエイティブ行為が大好きである。これで現代において労働として取り組まれているカテゴリーはある程度カバーできるのではないか？たとえば私はこんな具合であるが、私は特別な聖人君子ではない。あなたもまた別種の行為を「やりたい」と感じることだろう。たとえば私の友達には農業や狩猟を趣味とする人もいる。民家から泥を掻きだしたり、炊き出しをやったりするような災害ボランティアを楽しむ者もいる。ご近所さんのためにピザ窯をつくってやるような人もいる。奇しくも彼らはおしなべてニートである。世間的には怠惰の烙印を押されがちな彼らですら、このように自発的に他者に貢献したいという欲望を持ち合わせている。ならば、遊び活動によってたいていの労働は代替できるというブラックの考えにも、説得力を感じずにはいられない。

なるほど、遊び半分では社会を成り立たせるために必要なスキルの習得が追いつかないと考える向きもあろう。だが、むしろ自発的な営みの方がスキルが向上したり、効率があがったりすることは論を俟たない。そこら辺を歩いているプロフェッショナルを一人適当に捕まえて「こんなに素晴らしいスキルを身に付けるなんて、歯を食いしばって大変な苦労をされてきたのでしょう？」と質問してみるといい。十中八九「いえいえ、別に好きでやっていたら、気が付いたら上達していたのですよ」という返答が返ってくることだろう。労働となれば死んだ目で取り組む人も、遊びとなれば創意工夫せずにはいられないのだ。ブラックもこう指摘する。

> 人々はもっとも魅力のない単純作業すら、そうしなければ無駄になってしまう創意工夫を傾けて、できる限りゲームに変え

12　ドナルド・W・パフ『利己的な遺伝子　利他的な脳』（集英社、二〇二四年）

ようとする。[13]

なら、それで社会は成立するのではないか？　人々が遊んでいるだけで、社会は成り立つのではないか？　労働として行われている生産活動をまるっきり代替することができるのではないか？　むしろ、その方が生産性も高まるのではないか？　『労働廃絶論』は、このような疑問を私たちに投げかけているのである。

そしてこれがマルクスをはじめとした共産主義者との決定的な見解の相違である。マルクスは、生産力を高め自動化が進み、労働に割く時間を削減してようやく、自由の王国が訪れると考えた。しかし、ブラックの考えに立脚するならば、労働を撲滅できるかどうかと生産力とはなんの関係もない。生産力がどれだけ低かろうが自由の王国に住むことは可能なのである。なぜなら、人間の必要性に応える使用価値を生産する営みにたいしても、人は自由に遊ぶように取り組むからだ。だからこそ、ブラックは自由と生産は重なり合っていると主張したのだ。

13　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）三六頁

自由と必要性を対立させる、うんざりするような神学的論争は、ひとたび使用価値の生産と楽しい遊び活動の消費がぴったり重なり合えば、自ずと解決する。[14]

なぜ明るい社畜が存在するのか？

さて、ここまでの議論が意識高い系による説教に限りなく接近していることにお気づきだろうか。それは「労働は、誰かに貢献したり、自分の能力を高めたりする素晴らしい機会なのだから、怠けるのはもったいない。ニートや無職たちはその魅力に気づいて一歩を踏み出すべきだ」といった具合の説教である。このように強制的に生産活動を押し付けられた途端に、それはブラックの言う労働の定義を満たしてしまうことを意識高い系は見逃している。多くの人は「おい、引っ越し手伝えよ？」だとか「ちょっと男子！文化祭の準備手伝いなさいよね！」だとか「若者が老人に席を譲るのがマナーだろ？」などと言われたなら、途端に自由意志を棄損されたような感覚に陥り、本来その行為に備わっていた魅力は台なしになってしまうのだ。もちろ

14　ボブ・ブラック『労働廃絶論』（まとも書房、二〇二四年）四十頁

ん、これがなんの権力関係もない相手から言われたなら無視すれば済む。しかし、上司や社長、客に言われたら無視できないのである。その結果、遊びは労働へと堕すること になる（マルクスの疎外論も残念ながら同様の罠に陥ってしまった）。とはいえ、意識高い系の言うことにも一理ある。先述の通り、生産活動は本質的に遊びなのだ。労働として取り組んでいるうちに、労働者が喜びに気づき、夢中になることは十分あり得るだろう。それが生産とすら呼べないブルシット・ジョブであっても、そこに夢中になること自体は可能なのである。むしろ人は、自らの精神を守るために、労働をゲーム化しようと躍起になる傾向にある。

なぜこんなことが起きるのか？　現代において労働から逃れることはむずかしい。そのような状態で労働に致命的な不満を抱き続けると、人の心には認知的不協和が生じてしまう。思考（＝労働はやりたくない）と、行為（＝笑顔で上司や顧客にへいこらしながら労働している）が乖離しているのである。心理学者が口酸っぱく指摘するように、認知的不協和を放置すればメンタルが崩壊する。しかし、行為の方は、労働が強いられている以上は変えられない。ならば人は思考を変えてしまう。「一見無意味に思えるこの労働もやりがいがある」とか「成長できるし、いいか」とか「これこそ社会人の責務だ」といった具合に。その結果、労働者は無意味なマネーゲームや権力闘争、上司に気に入られることとすらもゲーム化していき、自らの欲望の対象として楽しむように心理状態を調整する。入社十年も経てばすっかり明るい社畜の出来上がりである。このようなプロセスを誰よりも明晰に描いたのはほかならぬニーチェであろう。

> 最も苦しみに慣れた動物は、苦しみそのものを拒否したりはしない。彼はそれを欲する、彼はそれを求めさえもする。もしその意義が、苦しみの目的が彼に示されるとすればだ。これまで人類の上に蔓延していた呪詛は苦しみの無意義ということであって、苦しみそのものではなかった。[15]

奴隷が、あるいは禁欲主義者が苦しみを欲するのと同じように、社畜も苦しみを欲する。キリスト教は労働がもたらす苦しみを有意味化した。現代の労働者は、労働教ともに呼べるWOKEな価値観（意識高い系の価値観）によって

15　ニーチェ『道徳の系譜』（岩波文庫、一九六四年）二七〇頁

ブルシット・ジョブすらも有意味化した。このプロセスをもたらす道徳を私はニーチェがいう「奴隷道徳」になぞらえて「社畜道徳」と呼んでいる。要するに明るい社畜は、自由意志と無意味な労働を重ね合わせようとし、部分的にそれに成功してしまったのだ。「労働はクソだ」と主張する通俗的労働批判と、「いや、労働にもやりがいはある」と主張する意識高い系の議論が永遠に平行線なのはこのことが理由であろう。彼らはお互いにまったく別の現象について語っているのである。労働とはその定義上、心理的に受け入れられてしまったなら、もはや労働ではなくなり、遊びへと接近していく。つまり、双方ともに労働について語っているつもりが、意識高い系の方は遊び（遊びと化した労働）について語っているのである。

さて、ここで新たな疑問が浮上するだろう。それは「どんなことにも人間は意味を見出すことができるのなら、これまで通り労働に歯を食いしばって取り組んでいればいいのではないか？　わざわざ労働の廃絶など訴えずとも、いまの社会をそのまま維持すればいいのではないか？」といった疑問である。なるほど、その考え方も一理なくはない。たとえば現代が戦後の焼け野原であったなら、人々に「労働は楽しいんだ！　お前たちも働け！」と鞭打ち、社畜道徳をインストールしようとすることには一定の合理性があったかもしれない（ブラックはこの主張には納得しないかもしれないが）。

実際、強制されていてもなお、生産活動には一定の魅力があることは注目に値する。たとえば天ぷら屋の店員が労働の愚痴を言うとすれば、どのようなものが想像できるだろうか？「無意味なノルマ」や「無意味な報告書」あるいは「モンスタークレーマー」や「長時間労働」に対する愚痴を言うのが普通であろう。だが、「なぜ俺は天ぷらを揚げたり、テーブルを拭いたりしなければならないのだ！」などという愚痴を聞くことは稀である。強制されていてもなお、意味がある生産活動ならそこにやりがいや喜びを感じることは比較的容易なのだ。もし労働の大半が人々の役立つ生産活動であったなら「そのうち人はそこにやりがいを見出すだろうからそのまま労働させておいても問題ない」という考えにも一定の説得力はある。

とはいえ、現代が戦後の焼け野原でないことが、『労働廃絶論』を現代に蘇らせなければならない理由の一つである。労働なる営みが、人々の生命維持や娯楽の提供に文句

なしに役立つのであれば、労働を強いられることには合理性はなくはない。だが、先述の通り、現代の労働はもはや無意味と化し、たんなるサディズムの押しつけとなり果てている。現代の社畜はサディズムに耐え忍ぶことに意味を見出し、自分と同じようにサディズムに耐え忍ぶことを他者にも強制しようとしているのだ。しかし、労働短縮論を持ち出して怠けようとする人々や、労働を苦痛だと感じている人々は、そのサディズムに意味を見出すことができなかった。当然である。冷静に考えれば、サディズムに意味を見出すことに、意味があるとは思えない（むろん、そこに意味を見出させようと躍起になっているのが、自己啓発セミナーを押し付けようとする胡散臭いコンサルであることは言うまでもない）。

なら、こうは考えられないだろうか。はじめから人々は意味を容易に見出せるような遊びに、欲望のまま、自発的に取り組めばいいではないか？　人びとの欲望は自己満足に向かうこともある一方で、生産やケアといった有意義な活動にも向かう。はじめから強制を排除する方が効率的だとは考えられないだろうか？　そして、こうも言えるだろう。「無意味な労働に取り組むくらいなら、自由に、自発的に、だらだら怠けてもらった方がまだマシではないか？」と。

遊びは人々のニーズを満たすのか？

ここで、想定される批判は次のようなものであろう。「なるほど、確かに一部の人々は自発的に生産活動を欲することはあるかもしれない。ただし、遊び半分で気まぐれに取り組まれる程度では、この社会の人口を養うには不十分ではないか？　ある程度の強制を働かせることなしに、本当に十分な生産量を確保できるのか？」。あるいは、「自分の関心ばかりを追求する人で溢れかえるのではないか？」といった懸念もあるだろう。つまり、「ピザ職人になりたい人ばかりで溢れかえり、小麦をつくる人がいなくなるのではないか？」といった類の話である。

この疑念はもっともであり、完全に払しょくすることは不可能である。なぜなら、その疑念を完全に払しょくするためには一定程度の生産量を保証する必要があり、それは生産を強制することなしに実現し得ないからである。要するに未来の保証をするためには強制が必要なのである（も

ちろん、強制したからといって保証されるわけではないことも確かなのであるが)。私たちは認めなければならない。未来の保証は不可能であると。ここで必要な心構えは、不確実な未来がやってきても人々は自発的に、遊びながら、荒波を乗り越えていくであろうという信頼なのである。そもそも、人が自由であるとはそういう意味ではないか？　自由とは予測不可能性を意味するのだから、予測不可能性を拒否することは、すなわち自由の拒否である。未来を確実なものにしたいという欲望こそが、悪魔のような全体主義や共産主義体制を生み出した。その歴史から、私たちはなにを学んだというのだろうか？

たしかに懸念はあるが、その懸念をもってして『労働廃絶論』の重要性を退けることはできない。『労働廃絶論』は、これまでの社会の根底にあった「労働は必要で避けられない」だとか「他者への貢献とは労働であり、苦痛である」という根拠のない幻想にたいする批判であり、その批判は至極まっとうなのである。これは議論の終焉ではなく、新たな議論の開始を意味しなければならない。それは「このコペルニクス的転回を踏まえて、どのように私たちは社会をつくりかえていくべきなのか？」という議論である。

とはいえ、一つの安心材料を提供することはできる。ここでブルシット・ジョブ論に舞い戻るのだ。私たちの社会には膨大なブルシット・ジョブが存在している。娯楽を売りつけるためのマーケティング合戦や、権力者を満足させる以外に役立たない書類埋め仕事・・・こうしたものがグレーバーによれば労働全体の四十パーセントにものぼるという。しかし、強制されない自由な人々がブルシット・ジョブに自発的に取り組むとは考えづらい。つまり、もしこの社会から強制=労働が撲滅されたなら突如として無駄になっていた四十パーセントもの労働力が一気にゆとりとして生じるのである。ちょっとやそっと怠ける人が現れたとしても、十分に人々のニーズは満たせるであろうと考えるのは、さほど突飛な発想というわけでもあるまい。むしろ、無益な労働を膨大に生み出す現代の労働システムが、いぜん成立していることにこそ、私たちは驚かなければならない。四十パーセントもの人々が無意味なことをしていてもなお、スーパーに食品が並び、家が建てられるだけではなく、あまつさえプレイステーションを楽しむ余裕さえあるのである。現代においてはエッセンシャルワークに取り組むよりも、なにも生み出さないピンハネ活動に勤しん

だ方が金が稼げるのである。それでもなお、この社会が成り立っているのだ。人間にはいったいどれだけの可能性とモチベーションが秘められているのかと、私は驚かずにはいられない。私たちの社会では「効率」が神の如く信奉されている。労働の廃絶された社会こそが、いまよりもっと効率的な社会なのではないか？

むろん、各人がなんの話し合いも行うことなく好き勝手に振る舞うだけでは、上手く生産活動は調整されないだろう。だが、繰り返すが、困っている誰かのニーズを満たすことすら、人は自発的に、遊び感覚で取り組むことができるのである。なら、無責任に聞こえるかもしれないが、こう断言してもいいのではないか。「誰かがなんとかするだろうし、なんとかしたがるのではないか？」と。災害ボランティアの現場ではそのことを痛感せずにはいられない。私たちは災害時における救助や家の掃除、インフラの復旧、食料の準備などが、政府の完璧な采配によってトップダウンで成し遂げられているかのように想像しているが、じっさいはほとんどがボトムアップ式に組織化された無償のボランティアに依存している。それでも、避難所で飢え死にする人が多数現れたり、誰が掃除するかについてのケンカから血みどろの争いがはじまったりしないことは驚くべき事態であろう。もし「自由な貢献で社会が成り立つはずない」と主張するのであれば、避難所は地獄絵図と化していなければ辻褄が合わない。有無を言わさず避難所生活を強いられ誰もが一定程度ピリピリしているはずの環境ですらそうなるのだ。自由が訪れた途端に、人々が殺伐とやるべきことを押し付け合うような事態が生じるとは想像しづらい。

なぜ人々は労働するのか？

さて、勘のいい読者であるならば、次のような疑問を抱いたかもしれない。「もし人が自発的に遊ぶように生産活動に取り組むのであれば、そもそも強制や労働がこの世界に誕生したのはなぜなのか？　別にそんなことをせずともニーズが満たされるのであれば、人類は強制という意味での労働を発明しなかったのではないか？　現に労働が存在しているということは、やはり労働は社会に不可欠なのではないか？」というわけである。その疑問に答えるためには、そもそも人間がなにを欲望するのかについて考えなけ

ればならない。

人間は起きている時間、なんらかの行為をする。行為とは、かんたんに「世界になんらかの変化を起こすこと」と定義することができる。つまり人は世界に変化を起こすことを欲望している。では、どのような変化なのか？　人間の行為はありとあらゆる領域に及び、それを十把一絡げにすることはできないが、共通項を見出すことは可能である。それは「意味のある変化」である。たとえば私はいま、パソコンのキーボードをたたいているが、これは「文字を入力し画面に表示させていく」という変化を欲しているからであり、その変化に意味があると感じているからだ。あるいは、行為の先の変化に意味を感じているのでなくとも、「行為という変化」そのものを欲する場合もある。たとえば、半ば無意識でペン回しをすることは、ペンを回すという能力を行使するという変化そのものを欲している。まとめると「人は意味のある変化や、意味のある行為を求めて、行為する」と言えるだろう。要するに人は、釘を打つためにハンマーを振るか、ハンマーを振るために釘を探す。そしておそらく二つの動機は常に入り混じり、入れ替わっているが、いずれにせよ行為を欲しているのである。

そして、人は行為能力を増大させていきたいという根源的な欲望を持っている。寝っ転がっていてもミルクが飲めるはずの赤ちゃんが、ハイハイを欲する理由はまさしくこれであろう。身体能力能力の向上によって行為能力を増大させる場合もあるし、道具を使用する場合もある。あらゆる道具は人間の能力を拡張するために存在している。紙を切るという行為能力をさらに増大あるいは洗練させるために、人はハサミという道具を手に取り、その使い方を練習する（ここまでの説明はドイツの心理学者カール・グロースの言う「原因となる悦び」という言葉が意図するところと、ほとんど同じ意味である）。

さて、ここで道具がハサミであればなんの問題もないわけだが、それが他者である場合もある。他者を操作したい。あるいは他者を操作し、大きな変化を起こしたい。人間がそのような欲望を抱くことは十分にあり得る。もちろんこれが権力欲と呼ばれる欲望である。これは貢献欲と同様に、人間が普遍的に抱く可能性がある欲望であろう。

とはいえ、権力欲は人類史の大半において壁にぶち当たっていた。ピエール・クラストルやデヴィッド・グレーバーのような人類学者がたびたび指摘するように、人々は

強制や権力の発生を抑制するためにさまざまな社会的メカニズムを考案してきた。その結果、かつての人類は光速で移動したいという欲望を諦めざるを得ないように、人を支配したいという欲望を諦めてきたのだろう。ただし、どこかで誰かがそれを大規模に成し遂げてしまった。それは誰だったのか？　言うまでもなく、それは後に「国家」と呼ばれる者たちである。国家とは、マックス・ヴェーバーにならえば次のように定義できる。

国家とは、ある一定の領域の内部で――この「領域」という点が特徴的なのだが――正当な物理的暴力行使の独占を（実効的に）要求する人間共同体である、と。[16]

もちろん、国家が警察や軍隊、刑務所といった暴力装置を独占しようとする理由は、国民にたいして強制力を行使するためである。ゆえに国家とは強制力の装置と言い換えることもできる。なぜ、このような強制力の装置を私たちは（とくに国家黎明期の人々は）受け入れたのか？　現在、一般的に受け入れられている説明は「万人による闘争にうんざりした人々が、トラブルを解決するために民主的にリーダーを選出した。そして人々は、リーダーがトラブルを強制的に解決するため暴力を組織化することに同意する社会契約を結んだ」というものである。この考え方をホッブズは「設立によるコモン‐ウェルス」と呼んだ。とはいえ、「設立によるコモン‐ウェルス」説には疑問を付さずにはいられない。トラブルだらけの人々が突如争いをやめて、自らの権力を特定のリーダーに差し出すという一点のみに合意する・・・などということがあり得るだろうか？　むしろ、あらかじめ暴力を独占していた男たちが、その合意を強制的に引き出した後、国家の正当性を主張するために、あたかも「設立によるコモン‐ウェルス」が生じたかのように歴史書のなかで偽装したと考える方が妥当ではないのか？　哲学者の萱野稔人も同様の議論を展開し、こう指摘する。

暴力的に優位にあるものが他の人びとに対して、暴力を行使しないことをひきかえに富や役務を提供させる。こうした事態のなかにこそ国家を成立させる信約は見いだされなくてはなら

16　マックス・ヴェーバー『職業としての政治』（岩波文庫、一九八〇年）九〜十頁

ないのである。[17]

もちろん、タイムマシンに乗って国家創設期を確認しに行くこともできないし、記録が残っているわけでもあるまい。どのようにして暴力の優位性を確保したのかも、いまとなってはわからない。だが、マルクスやエンゲルスが「国家はすでに存在している階級を守るために生まれた」と想像したのとは逆に、なんらかの優位性を確保したところから国家がスタートしたという考えは妥当なものであるとみなし、そこを出発点にしてみたい。

さて、晴れて暴力を独占し、国民を強制することに成功した国家は、小麦や道路、神殿や城壁などを国民につくらせようとしただろう。しかし、順風満帆というわけにはいかなかったはずだ。ジェームズ・C・スコットも『反穀物の人類史　国家誕生のディープヒストリー』(みすず書房)の中でたびたび指摘する通り、初期国家は、暴動、反乱、人民の逃亡を頻繁に招き、しょっちゅう崩壊していた。先述の通り、人は認知的不協和を嫌う。暴力で押さえつけられた人々が、その状況に納得し続けることはむずかしいのだ。だからこそ、支配を正当化する大義名分をひねり出すのに支配者たちは試行錯誤していた（古代の支配者たちが神話や歴史書をつくるのにあれだけ躍起になった理由を考えてみればいい）。おそらく、その試行錯誤のプロセスのなかでようやく発明されたのが貨幣だったのではないか。

人類学者たちがうんざりしながら主張するように「貨幣は、物々交換を不便に思ったどこかの天才がある日突然、貝殻を交換の媒体として扱うことを思いつくことによって発明された」といった一般的に受け入れられている説明は誤っている。そのことはいまや経済学者やイングランド銀行すらも同意している。貨幣とは支払いの約束・・・つまりは負債として発明されたものが、流通した結果にすぎない。たとえば神殿の建設作業を命じられた国民Aに対し、国家は「収穫期には〇〇ブッシェルの大麦を渡そう」という借用証書を手渡す。それを満期になるまで持っていてもいいわけだが、別の支払いに使用することもできる（ちょうどトヨタの約束手形が流通し、トヨタとは関係のない取引に使用されるのと同じである）。こうして貨幣は誕生した。基本的に貨幣とは国家による約束手形であり、負債であり、借用証書なのだ。

17　萱野稔人『国家とはなにか』（ちくま学芸文庫、二〇一三年）一一四頁

同様の指摘を行なっている。

疎外された労働があって、それが国家を生み出すのではありません。わたしの考えでは、正反対なのです。要するに権力から、つまり権力の保持から出発して、疎外された労働が生まれるのです。[18]

ここで言う「疎外された労働」とは、ブラックの用語でいう「労働」そのものであろう。そしてここから先はクラストルは言及しなかったわけだが、さらに労働が必然的に貨幣を生んだと考えるのが妥当であろう（逆に言えば、強制がなければ国家もないし、労働もないし、貨幣もなかったはずだ）。そして、貨幣をつかった思考様式は人々にとある変化をもたらした。人々は頭の中で人間のあらゆる行為を二つに分断していったのだ。「貨幣を受け取るための生産活動＝不快、苦痛」「貨幣を渡して人にやらせる行為＝快、欲望の対象」といった具合に。

繰り返すが、もともと人がやる行為はすべて遊びであり、さてここで国家が誕生するまでのあいだ、文字がほとんど発明されなかったことに想いを馳せて欲しい。よく知られる通り、文字とはロマンチックな詩や恋愛小説を書き記すために発明されたのではなく、負債の計算のために発明されている。国家が誕生するまでの間、ほとんど誰も負債を計算する必要性を抱かなかったのだ。それはなぜか？「俺はこれだけやったのだから、せめてこれだけよこせ」という思考が生じるには、そもそもやりたくないことをやっている必要がある。つまり、強制が必要なのだ。そして、「おい、俺ばっかりやらされて不公平じゃないか？」などと感じるためには、より一層の強制が必要なのである。そのとき国家はこう言ったのだろう。「わかった。わかった。お前が労働した分はあとから報酬をやろう。なに？　俺ばっかり働いていて不公平？　だったら厳密に計算しよう。文字で記録しよう。負債を発行しよう。これで文句はないだろう？」と。ここでようやく国民たちはしぶしぶながら納得することができた。自由意志のわずかな断片を、強制労働と重ね合わせたのだ。つまり、まずはじめに強制があった。強制が国家を生んだのではない。強制こそが国家であった。そして強制が労働を生んだ。ピエール・クラストルも

18　ピエール・クラストル『国家をもたぬよう社会は努めてきた』（洛北出版、二〇二一年）三五頁

言い換えれば快であった。与えることと受け取ることはほとんど一体化していた（これは現代人にとってもそうであろう。自分の手料理を誰かに振る舞うことは、誰かの手料理を食べることと同じかそれ以上に喜ばしい行為なのである）。しかし、国家と強制、貨幣が、それを快と不快に分断してしまった。そして、生産活動が不快であるという考えが広く行き渡った結果、私たちは後には戻れなくなってしまった。「生産活動？　それは大変なのだから、やるなら正当な対価を貰わなくちゃ！　そうでなければ誰もやりたがらないよ」という思考様式を、私たちはすっかり受け入れてしまったのである。もともと、やりたいように生産活動し、贈与し合う人々は対価を求めようだなんて思わなかったというのに。そして労働という名の強制は、必要で避けられないという思い込みに包み込まれて保存された。こうして労働概念は古代において完成し、現代に至るまで破壊されることはなかった。

つまり私たちは大昔の国家・・・サイコパス気質の支配者たちのプロパガンダに、いつまでも縛り付けられているのである。そして、はじめは建前とした登場したプロパガンダを、現代の支配者は律儀に信じきっている。誰も国家や労働、貨幣がなぜ生まれたのかをもう覚えていないのだ。だから私が支配者の側に「お前たちはプロパガンダで俺たちを支配している！」と私が大声で叫んでも無駄であろう。本人たちにその自覚はないのだから。支配者たちは「労働は必要なんだから仕方ないでしょ？」とだけ言い、私は常識や論理的思考力の欠如したキチガイであるとみなされるだろう。もちろん、ここまで書いてきたストーリーは断片的な証拠を拾い集めておこなった思考実験にすぎないが、いまのところ私の仮説を反駁する証拠は私の知る限りはない。おそらくさほど現実と乖離があるわけでもないだろう。

強制を撲滅する方法

さて、大きく本筋から脱線してしまったが、人類社会は労働せずとも成り立つはずなのに、なぜ労働しているのかについては、これで説明できただろう。最後に残った読者の疑問に答えなければならない。それは「強制を排除できるのはわかってけど、具体的にどうやって？」という疑問である。ブラックはその点に関してなんらヒントを残していないが、私から一つの提案を行いたい。それは普遍的ベー

シックインカムである。

労働者が強制される理由を考えて欲しい。それはたんに労働しなければ路頭に迷うからであり、上司に逆らえばクビになるからである。これは過度に事態を単純化しているとはいえ、この社会に存在するもっとも強大な強制力の源泉が金であることは間違いないだろう。「金の成る樹さえあれば、あのクソ上司をぶん殴って、さっさとやめてやる」と文句を言うサラリーマンに、週末の飲み屋で出会わない方がむずかしいのだ。

熱心なMMT論者なら、租税貨幣論を持ち出して、金が力を持っているのは税を金で支払わなければならないからだと主張する。これは金（とくに鋳貨）の歴史的起源としては正しいかもしれないが、現代においては正しいとは言えない。なぜなら、人頭税のない現代において無収入の者は無税であるが、無収入のものでも金を欲さずにはいられないからである。現代においてみなが金を欲する最大の理由は、金がないと生きていけないからである。

資本主義が駆動する理由もここから説明すべきであろう。なるほど、斉藤幸平のようなマルクス主義者がたびたび指摘してきたように、資本家は複式簿記や株式会社という仕組み、あるいは銀行システムに突き動かされ、まるで資本の操り人形のごとく資本の増殖に邁進するかもしれない。だがこの説明だけでは「なぜ労働者が資本家のパラノイア的妄想に付き従うのか？」という疑問が解消されない。その理由は、都市に追いやられたプロレタリアートたちが自給自足するという術を持たず、金を追い求めざるを得なかったからであろう。現代のプロレタリアートも同様である。金がなければ生きていけない。だから金を支払う企業（あるいは顧客や、金の流れに影響を与える上司や人事部）に逆らえない。問題の核心はここにある。

疑いようもなく金とは強制力であり、権力である。権力が機能するのは、もう片方が権力をもたない場合に限られる。ビル・ゲイツがイーロン・マスクを支配することはできないが、ビル・ゲイツは生活に十分な金（＝権力）をもたない労働者を支配することはできる。しかし、ビル・ゲイツは、ぜったいに路頭に迷うことのない労働者を支配できない。あなたがいまビル・ゲイツに「ケツを舐めろ」と言われたなら舐める可能性が高いが、あなたが毎月二十万円の不労所得を手にしているのなら、舐めない可能性が高い。つまり、ベーシックインカムとは、万人に「命令を拒

否したり、その場を離れたりするだけの最低限の権力」を保証するシステムなのだ。上司の命令に逆らおうが、ブルシット・ジョブに手を染めないでいようが、家でボーっとYouTubeを鑑賞していようが、ぜったいに路頭に迷うことのないという権力を配れば、彼を支配することはほとんど不可能なのである（もちろん暴力を使うならばその限りではないが、暴力だけに頼った支配が長続きしないことは先述の通りである）。

さて、それでは労働という強制力から自由になった人々は途端に怠けてしまい、誰もやるべきことをやらなくなるだろうか？　そうではあるまい。繰り返し指摘した通り、生産やケアは遊びなのである。退屈に飽き飽きした人々は、自由に、自発的になんらかの社会貢献を開始せずにはいられなくなるだろう。そのことを確信するには、なにもせずにダラダラすごす人生がどれほど耐え難いかを想像してみれば十分である。刑務所の囚人たちですら、独房でボケっと過ごすより、洗濯したり掃除したりする権利を欲するのだ。ドストエフスキーは自身の囚人生活をもとに描いた『死の家の記録』（新潮文庫）において、苦役を終えて、ゲームで遊ぶ権利すらある囚人たちが、自発的に職人仕事を始めるさまを描写した。怠惰なダメ人間だと馬鹿にされる彼らですらそうなのだ。マジョリティがなんらかの行動を開始しないと考える方がバカげているのだ。

あるいは、無職たちがこんなふうに言うのを聞いたことはないだろうか？「なにもせず無職として過ごすのは才能がいる。だから労働している方がいい。ふつうの人はなにかをやりたくなるのだから」と（まるで怠惰をステータスシンボルであるかのように語るのが、彼らの特徴である）。実際その通りだと思う。ただし、労働ではない形でなにかをやる方がいいに決まっているのである。

さて、「財源はどうするのか？」といったありきたりな質問に対しては、「金を刷ればいい」とだけ端的にお答えしておこう。現代の国家（ＭＭＴ論者が好む言い方をするならば「統合政府」）は、利子を払う必要もなく、永遠に返済されることのない負債を無限に発行する能力を有している。ご存じの通りそれは「金」や「貨幣」と呼ばれている。繰り返すが、金とは歴史的に国家にとっての負債である（だからこそ日本銀行のバランスシートには、発行銀行券が負債として計上されている。これは、あなたの財布に入っている千円札が、日本銀

行の負債であることを意味する)。理論上、国家は金を無限に生み出すことができる。

「おやおや、ジンバブエがどうなったかご存じないようだ・・・」と斜に構えて批判したい衝動にかられた人もいるだろう。だが、現代(特に先進国)においてインフレを恐れるのはばかげている。インフレとは需要に対して供給が致命的に追い付かなくなったときに生じるものである(歴史的に、致命的なインフレは戦争等で生産設備が破壊されているときにしか生じていない)。ここで、現代における労働がブルシット・ジョブまみれになっている理由に注目したい。ふつうにモノをつくって売っていても金儲けできなくなったから、言い換えれば需要が頭打ちになったから、ブルシット・ジョブがあふれかえっているのだ。イオングループの利益の大半が野菜や肉を販売することではなく、賃料やポイントをちらつかせてクレジットカードを契約させる行為によって得られているという事実に注目しよう。意識高い系が好んで使う「モノが売れない時代」という言葉は、すなわち供給過剰を意味している。そして企業は「頼むから供給させてくれ」と必死になって顧客の財布を開けようとする。その結果「うちに任せてもらえば顧客の財布を開けて見せますよ」と豪語する広告業界やコンサル業界が跋扈した。あるいは、なにかと理由をつけてピンハネしようとする金融、人材、ITといった業界が、ピンハネの分け前に預かるための椅子取りゲームで消耗している。そして「椅子取りゲームでの勝ち方、教えますよ?」と教育ママを唆して大金を巻きあげる学習塾やFラン大学は、タチの悪い情報商材とほとんど見分けがつかなくなった。資本主義の大部分はもはや略奪品の分配をめぐって争い合う封建制になり果て、社会がブルシット・ジョブで溢れかえっているのである。ちょっとやそっと需要が増えようが、供給が減ろうが、なんの問題もないのだ。むしろ、ブルシット・ジョブを辞めてくれた方が供給能力が高まる可能性すらある。部下の仕事にネチネチ文句を言う上司や、仕事を右から左へ流すだけのピンハネ屋、余計な報告書を要求するだけの鬱陶しいコンサルは、ゴルフを打ちに行ってくれる方が全体の生産性があがり、供給能力が高まることはあきらかではないか。

もしかするとベーシックインカムは、アナキストにとって眉をしかめたくなるような解決策かもしれない。なぜなら「政府に生殺与奪を握られ、政府権力が増大するので

は？」という懸念が思い浮かぶからである。だが、ベーシックインカムは政府権力を増大させるのではなく弱体化させることは、次のように考えてみればあきらかではないか。たとえばここに百兆円の予算を自由に采配できる権限を持ち、「さーて、誰に配ろっかなぁ」と目くばせするA国の首相がいたとする。かたや自動で百兆円を国民に平等に分配することを義務づけられているB国の首相がいたとする。私ならA国の首相に「ケツを舐めろ」と言われたなら喜んで舐めるが、B国の首相に言われたなら顔面を殴るだろう。このとき、B国の首相の方が権力者であるだなんて思えないのである。金が権力である以上、金を誰に流すかを決定する力も権力化する。なら、有無を言わさず政治家から予算の決定権の大半を奪い取るベーシックインカムは、権力の弱体化効果をもたらすのである。

　そもそも金とは、政府の負債であった。政府は無限に負債を生み出す能力を持ち、その負債は返済する必要もない（あなたが日本銀行券をもって日銀になんらかの返済を迫るようなことはあり得ない）。また、徴税によって強制的に消滅させることもできる（徴税とは、暴力を背景にした負債の「踏み倒し」である）。要するに国家はほぼノーコストで支出し、ノーコストで国民に命令をくだすことができるのだ。その強制力を、ベーシックインカムを定めた法律（＝政府を唯一支配することができる強制力）によって強制的に国民に分配するのである。これは言い換えれば、政府から国民への権限移譲とみなすこともできる。権限委譲しようとする政府の権力が、いったいどうすれば増大すると言うのだろうか？

　さて生殺与奪を握られる状況から脱した人々の働きが、賃労働という形を取るかどうかはわからない。ブラックは雇用＝賃労働や職業を撲滅すべきであるというスタンスを取っていたが、これは強制という労働の定義からすると、必然的に導出される結論というわけではない。なぜなら、自発的に雇用されることや、自発的に選択される職業が存在し続けることはあり得るからである。矛盾するようだが、それは労働ではなく、少なくとも本人が満足しているのであれば取り立てて騒ぎ立てる必要のない行為である。

　金に支配されていない自由な社会における雇用では、パワハラやセクハラ、不正、企業犯罪、無意味な権力構造、マイクロマネジメントが横行することはないだろう。なぜならば、不満を抱けば被雇用者はそこから離れることが可

能だからである。同時に恵方巻きを大量廃棄するような過剰生産や、顧客に無断で保険に加入させるような企業犯罪、CO2排出テストを誤魔化すような不正も消え去るであろう。そんな行為を強制されることなく自ら望んでやる人間が存在するとは常識的に考えられないからである。このとき資本主義が撲滅されているかどうかはさほど重要ではない。すでに骨抜きになっているからだ。そしておそらくボブ・ブラックが資本主義を批判したのではなく、労働を批判したのは同様の理由だろう。労働の問題さえ解決すれば、資本主義などたいした敵ではないのである。

また、人々の生殺与奪の権を人々が取り戻し、労働が消え去ったのなら、国家もさほど有害な影響をもたらしはしないだろう。国家が戦争をしようとするなら、軍隊に所属する人々は一斉ボイコットすれば済む（生殺与奪を握られてもいないのに、外国の病院や学校に爆弾を落としたがる人間がそこら中に溢れかえっていると想像する人がいるのなら、その人には心理カウンセリングをお勧めしたい）。また、はした金で買い叩かれて、地元に原発を建てさるような人もいなくなるだろう。警察署や刑務所も、きっと次々に閉鎖されていくにちがいない。労働の義務から解放され、自由な社会が訪れたときに、強盗や殺人をする理由が私にはほとんど思い浮かばないのである。学校は、ブラックが言うように閉鎖されるか、より自由な学びの場へと生まれ変わるだろう。小卒でも中卒でも路頭に迷う心配がないのであれば、高圧的な教師や、不愉快な校則、つまらない授業にはNoを突きつければ済む。そのとき、学校がこれまで通りの社畜養成所であり続けるはずがない。

労働が廃絶された社会において、人々の行為がどのように組織化されるかはわからない。もしかしたら雇用という形式が依然として持続するかもしれないし、いつかなくなるかもしれない。あるいは、もっと無償のボランティアに心血を注ぐ人々が増えていくかもしれない。それはわからないのである。だが、どのような形であれ、人々が強制力の影響から離れて自発的に選択したものであれば否定する必要はない。ブラックは理想的な生産の組織化方法を命令しているわけではない。マルクス主義者のようにあれこれ命令しようとはしない。ただ、自由に自発的に選択されるのであれば、それはすべて正解なのである。

結論

長くなってしまったが、まとめよう。『労働廃絶論』は、そのほかの労働批判とは根本的に異なることはご理解いただけただろうか。そして、そのほかの労働批判が陥りがちなジレンマを回避することができることもわかるだろう。そのジレンマとは「それってお前が働きたくないだけで、結局誰かが労働しなければならないんじゃないの？」というものである。労働が最低限必要であるという前提を覆さない限りは、このジレンマを抜け出すことは不可能である。労働を批判する寝そべり族たちも、あるいはかつて資本主義を批判したヒッピーたちも、歯切れの悪い議論を展開しなければならなかったのは、彼らが電気やガスを使用するという疑いようのない事実を正当化できなかったからであろう。

一方で『労働廃絶論』は労働のない社会に向けた、極めて現実的な提案であり、おおむね首尾一貫した矛盾のない提案である。「労働を攻撃している」という一点を除き、現代の倫理観や道徳観にも反していない。むしろ、人間に無条件の信頼を寄せ、自由を徹底的に礼賛するという点においては、拍手喝采で迎え入れられてもおかしくない思想である。そして、アナキストたちが夢見てやまない、誰も命令されず、誰も強制されない世界を形作るための知的基盤になる。「誰一人として労働すべきではない」という言葉は命令であるように見えて、実は命令ではない。なぜなら、「いや、俺は労働したいのだ！」という人が現れたとしても、労働の定義上、彼がやることは労働ではなくなるからである。

万人が好きなことをやり、万人のニーズが満たされる。その社会が持続するならば、金はいつか不要の長物と化すか、せいぜいなくてもいい手土産レベルの存在に堕するだろう。もしあなたの生活が保証されているなかで、好きなことができるなら、そのとき金を要求する必要がどこにあるだろうか？　そのとき「俺はこれだけやったのだから、お前たちもこれくらいやれ！」などと憤る人も消え失せる。それは「俺は一日十回シコるのだから、お前らも一日十回シコれ」と言うのとほとんど同じ、頓珍漢な発言と化すのである（これがやりがい搾取に見えるのであれば、あなたはいまだ労働短縮論の価値観から抜け出していないことを意味する）。

金勘定には膨大な労働力や資源が注ぎ込まれている。

ビットコインの計算だけでオランダ一国分の電力が消費されていることを考えてもみよ。あるいは、税金の計算だけでトラックドライバーの労働時間全体の倍以上の時間が注ぎ込まれている・・・などという説得力のある俗説を聞いたことはないだろうか。もし金そのものに注ぎ込まれていた労働力や資源がごっそり不要になったなら、人類社会はまた膨大な生産力の余剰を手にすることになる。ますます、自由な遊びだけで社会を成り立たせられる可能性は高まることだろう。

アナキストたちは、そして私たちの社会は、『労働廃絶論』をアナキズムの神々が祀られた祭壇から引きずりおろし、議論のテーブルのうえに載せなければならないだろう。もし私たちがより良い社会を実現したいと願うのであれば。

久保一真 a.k.a. ホモ・ネーモ
出版社「まとも書房」の代表でありながら、哲学者としても革新的な労働批判を展開し、次世代の論客として注目を集めている。著書に『14歳からのアンチワーク哲学　なぜ僕らは働きたくないのか?』『働かない勇気』など、訳書にボブ・ブラック『労働廃絶論』などがある（いずれもホモ・ネーモ名義）。

『14歳からのアンチワーク哲学
なぜ僕らは働きたくないのか?』
著 ホモ・ネーモ
まとも書房
1800円+税

『労働廃絶論』
著 ボブ・ブラック
訳+解説 ホモ・ネーモ
まとも書房
1000円+税

自由と抵抗の雑誌

黒煙 Vol.1

発売：2025 年 1 月 19 日 (文学フリマ京都 9)

発行：東シベリア集団

編集：太田やくーと・久保一真

写真提供：マカッサルの友人 D

Twitter（X）：https://x.com/addict_ykt

Blog：https://yk1.hatenablog.jp/

Email：omuanarchy@gmail.com

「東シベリア集団」は基本的に管理人の Twitter 相互フォロワーを対象とした限定的な Discord サーバーです。QR コードのリンク先は Privatter にログインした状態でなければ閲覧することができないことをご了承ください。また Twitter をしていないけれど参加に関心がある、Privatter にログインすることに抵抗があるなどといった事情がある場合は、上記のメールアドレスまでご連絡ください。

東シベリア集団招待リンク

自由と抵抗の雑誌

黒煙

BLACK SMOKE Vol.1

発売：2025年1月19日
発行：東シベリア集団
編集：太田やくーと・久保一真
定価：500円